

日本地質学会 *News*

Vol.26 No.4 April 2023



一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理 事

任期：2022年6月11日から2024年総会

会長（代表理事） 岡田 誠（茨城大学）

副会長 杉田律子（科学警察研）
星 博幸（愛知教育大学）

常務理事 中澤 努（産業技術総合研究所）
副常務理事 緒方信一（中央開発（株））
執行理事 内尾優子（国立科学博）
内野隆之（産業技術総合研究所）
尾上哲治（九州大学）
加藤猛士（川崎地質（株））
狩野彰宏（東京大学）
亀高正男（（株）ダイヤコンサルタント）
小宮 剛（東京大学）
坂口有人（山口大学）
高嶋礼詩（東北大学）
辻森 樹（東北大学）
松田達生（工学気象研究所）
矢部 淳（国立科学博）
山口飛鳥（東京大学大気海洋研）

理 事 青矢陸月（徳島大学）
芦 寿一郎（東京大学）
天野一男（東京大学空間情報科学研究センター）
磯崎行雄（東京大学）
大友幸子（山形大学）
大橋聖和（山口大学）

笠間友博（箱根町立箱根ジオミュージアム）
神谷奈々（同志社大学）
亀田 純（北海道大学）
川村紀子（海上保安庁海上保安大学校）
北村有迅（鹿児島大学）
清川昌一（九州大学）
黒柳あずみ（東北大学学術資源研究公開センター）
桑野太輔（千葉大学）
小松原純子（産業技術総合研究所）
斎藤 眞（産業技術総合研究所）
佐々木和彦（佐々木技術士事務所）
沢田 健（北海道大学）
下岡和也（愛媛大学）
菅沼悠介（国立極地研究所）
高野 修（石油資源開発（株））
西 弘嗣（福井県立大学恐竜研究所）
野田 篤（産業技術総合研究所）
細矢卓志（中央開発（株））
保柳康一（信州大学）
堀 利栄（愛媛大学）
松田博貴（熊本大学）
三田村宗樹（大阪公立大学）
道林克禎（名古屋大学）
矢島道子（東京都立大学）
山路 敦（京都大学）
山本啓司（鹿児島大学）

監 事

任期：2020年5月23日から2024年総会

岩部良子（応用地質（株））
山本正司（山本司法書士事務所）



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156（振替口座 00140-8-28067）

e-mail: main@geosociety.jp ホームページ <http://geosociety.jp>

日本地質学会 *News*

Vol.26 No.4 April 2023

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

各賞・助成……2

令和5年度 隠岐ユネスコ世界ジオパーク学術奨励事業募集/カフラマンマラシュ (トルコ南東部) 地震関連国際緊急共同研究・調査支援プログラム (J-RAPID) /2023年度「深田賞」募集/伊藤科学振興会研究助成公募 (宇宙地球科学分野) /2024-2025年開催藤原セミナー募集/第14回 (令和5年度) 日本学術振興会育志賞候補者推薦依頼/住友財団2023年度基礎科学研究助成/住友財団2023年度環境研究助成

公募……3

弘前大学大学院理工学研究科 (変動地形学・測地学分野准教授) 教員公募/京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設准教授公募/福岡大学理学部地球圏科学科地球科学分野公募 (古生物: 助教) /福岡大学理学部地球圏科学科地球科学分野公募 (地球物質科学: 助教) /東京工業大学科学技術創成研究院多元レジリエンス研究センター火山・地震研究部門助教公募

案内……5

ワークショップ: 掘削とモニタリングによる海山沈み込みとスロー地震の関係の解明/日本学術会議公開シンポジウム「有人潜水調査船の未来を語る」

博物館・ジオパークで地球を学ぼう! (16)

大阪市立自然史博物館……6

2023年地質の日行事……8

惑星地球フォトコンテスト: 第14回ほか入選作品展示会/街中ジオ散歩 in Yokohama「身近な地形・地質から探る横浜の歴史」/オンライン普及講演会「日本列島の地質探訪—古生代から新生代まで」/近畿支部: 第40回地球科学講演会「日本海拡大時の日本列島の変動—地質と古地磁気の研究からどこまでわかっているか—」/西日本支部: 第15回「地質の日」企画 身近に知る「くまもとの大地」/四国支部: /化石発掘体験—化石レプリカを見つけてみよう!—その他: 観察会「観音崎の地層と関東大震災の傷跡をたどる」

CALENDAR……10

第14回惑星地球フォトコンテスト審査結果……12

TOPIC……16

第11回学生のみマラヤ野外実習ツアー実施報告 (吉田 勝ほか)

表紙紹介……17

第14回惑星地球フォトコンテスト: 最優秀賞「古代の双六」(朝永武志)

委員会だより……18

ジオパーク支援委員会: 市民対象公開シンポジウム「ジオパーク地域に伝わる伝承と地質学: 古代からの自然感を今に活かす」実施報告

地質学雑誌: 新しい論文が公開されています……19

地質学雑誌特集号 (冊子) 販売のお知らせ……20

支部コーナー……21

関東支部: 学生・初級者向け「地質断面図」の書き方講座のお知らせ/アウトリーチ巡検報告 相模原市の相模野台地の地形・地質観察/中部支部: 2023年支部年会開催のお知らせ

今年も業界説明会を開催します!……23

一般社団法人日本地質学会第15回総会開催について……24

印刷・製本: 日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24

各賞・研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します。

令和5年度 隠岐ユネスコ 世界ジオパーク学術奨励事業募集

隠岐ジオパーク推進機構では、隠岐ユネスコ世界ジオパークの科学的な資料の蓄積を図るため、大学生、大学院生、研究者等を対象に隠岐に関わる調査研究を助成します。多くの方のご応募をお待ちしております。

1. 助成対象事業：隠岐にかかわる調査研究で、次のいずれかに該当するもの。

【新規】隠岐にかかわる島内外の人文・社会科学および自然科学にかかわる調査研究で、2023年度で実績報告が可能な研究。

【継続】隠岐にかかわる島内外の人文・社会科学および自然科学にかかわり、かつ、過去3年以内に隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会または隠岐ジオパーク推進機構から助成金の交付を受けた調査研究で、2023年度で実績報告が可能な研究。

※調査地が島外でも、隠岐の価値を高める調査研究であれば、対象とします。

2. 助成対象者：以下の個人もしくはグループ。
(1) 大学に在籍する大学生または大学院生
(2) 研究機関等で研究活動に従事する者
(3) その他、隠岐ジオパーク推進機構理事長が認めた研究者

3. 助成金の額等：一件あたり上限20万円（新規3件程度、継続3件程度）ただし、助成対象研究は1助成対象者につき1件とします。

4. 募集期間：

【新規】2023年4月3日（月）～2023年5月29日（月）※必着

【継続】2023年4月3日（月）～2023年4月28日（金）※必着

問合せ先：一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 事務局 担当：立花

〒685-0013 鳥根県隠岐郡隠岐の島町中町目貫の四六1番地

TEL：08512-2-1577, 08512-3-1321（総務）

FAX：08512-2-1406, 08512-3-1322（総務）

E-mail：info@oki-geopark.jp

https://www.oki-geopark.jp/news/2070/

カフラマンマラシュ （トルコ南東部）地震関連 国際緊急共同研究・ 調査支援プログラム（J-RAPID）

科学技術振興機構（JST）は、令和5年2月トルコ南東部を震源とする地震（カフラマンマ

ラシュ（トルコ南東部）地震といいますが）に関連した緊急を要する研究・調査に関して「国際緊急共同研究・調査支援プログラム（J-RAPID）」を実施します。

公募分野：

- ・地震発生メカニズムに関する研究
- ・建物やインフラ被害の詳細把握と被害拡大メカニズムに関する研究
- ・緊急避難・救助対策に関する課題調査
- ・災害過程における健康影響に関する研究・調査
- ・その他カフラマンマラシュ（トルコ南東部）地震に関連する研究・調査

公募期間：2023年3月15日（水）～5月31日（水）12：00

支援規模：1課題あたり300万円～600万円（間接経費10%を含む）

採択予定数：10件程度を予定

応募の詳細は下記をご参照下さい

https://www.jst.go.jp/inter/program/announce/announce_rapid_8th.html

2023年度「深田賞」募集

深田地質研究所は、1954年に故深田錠造氏の寄付行為のもと、故深田淳氏を中心として地質工学の創造、地質学の普及、地質技術者の職域の開拓を旗印に財団法人として創設されました。その後、2011年に公益財団法人に移行し、その事業として「複合的地球システム及びその社会とのかかわりに関する研究、普及、育成、助成・顕彰」と謳いました。この度、当所の設立趣旨に鑑み、この分野で陰になり日向になり顕著な功績をあげた人を讃え、それがまた後進の励ましになるよう、2022年に深田賞を創設しました。

顕彰候補者：顕彰候補者は、上記理念に沿い、複合的地球システム及びその社会とのかかわりに関して著しい功績が認められる個人または団体で、かつ、所定の様式をもって応募された者となります。応募には申請者のほか2名の推薦が必要です（自薦も可）。ただし、本研究所の役員は、その任期中に顕彰候補者となることはできません。

応募書類：① 2023年度深田賞申請書 ② 申請と関連した業績を示す資料（自由様式、A4版10ページ程度） ③ 被推薦者履歴書 *応募書類は、本目的以外には使用しません。

応募期限：2023年6月30日（当日消印有効）。

顕彰：受賞者には記念品と副賞100万円を贈呈します。また、適切な時期に顕彰記念講演を行っていただきます。

提出および問い合わせ先：

〒113-0021 東京都文京区本駒込2-13-12

公益財団法人 深田地質研究所 船戸

TEL.03-3944-8010 fax.03-3944-5404

e-mail: fgi_award@fgi.or.jp

詳細は、深田地質研究所ホームページをご覧ください。

https://fukadaken.or.jp/?page_id=6813

伊藤科学振興会研究助成公募 （宇宙地球科学分野）

本助成は宇宙地球科学分野（関連深い学際領域を含む）の基礎的研究において、独創的な研究を行う研究者を対象とします。

1. 応募者の資格：博士の学位を有し、2023年4月1日現在の年齢が満40歳以下の若手研究者（日本国内の研究機関に所属する研究者で、国籍は問わない）

2. 申請期間：2023年4月20日（木）～7月5日（水）24:00

3. 助成金：1件100万円（上限）

4. 助成件数：3～4件

応募者は、研究助成申請書と申請承諾書（署名、捺印あり）、論文別刷（3編以内）をオンラインストレージサービス（https://firestorage.jp/）にアップロードし、そのURLを申請者のE-mailに添付し伊藤科学振興会事務局宛てにご提出ください。研究助成申請書、所属長の申請承諾書は伊藤科学振興会ホームページよりダウンロードください。

伊藤科学振興会ホームページ

http://www.itokaku.or.jp/

公益財団法人伊藤科学振興会事務局

〒162-0801

東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター（株）国際文献社内

E-mail：itokagaku-post@as.bunken.co.jp

TEL：03-6824-9371（受付時間 9:00-12:00 / 13:00-17:00）

FAX：03-5227-8631

2024-2025年開催 藤原セミナー募集

藤原科学財団は、科学技術の振興に寄与することを目的として、2024～2025年の間に「藤原セミナー」の開催を希望する研究者から、下記募集要項に基づいて申請を受け付けます。申請された案件について選考を行い、採択されたものに対してセミナー開催に必要な経費を援助いたします。

1. 対象分野：自然科学の全分野

2. 応募資格：わが国の大学等学術研究機関に所属する常勤の研究者

3. 開催件数：2件以内

4. 開催費用援助額：12,000千円以内

5. セミナーの要件

(1) セミナーは、国際的にも学問的水準の高いものとし、そのテーマはなるべく基礎的なものであること。原則、二国間会議、定期的に行われる国際会議、およびその準備会議、サテライト会議は対象としないが、「藤原セミナー」として意義が十分に認められる場合

は、例外として採択の候補とする。

(2) 参加者は、50～100人程度とし、外国人研究者が参加者の5分の1程度含まれること。なお、国内外の優れた研究実績を有する若い専門研究者の参加を奨励する。

(3) セミナー開催対象期間は、2024年1月1日～2025年12月31日

(4) セミナーの開催地は、日本国内であること。

(5) セミナー開催日数は、2～4日以内とする。

(6) 参加者が、セミナー開催期間中、起居を共にすることを原則とし、計画された講演・討論のほか、個人的な討論など自由な雰囲気での学問的な交流と人間的接触を深め、永続する協力の基盤を作るようなものであること。

6. 申請受付締切：2023年7月31日（月）24時到着分まで有効

7. 当財団が支給する経費

セミナー開催に直接必要な経費として当財団が認めたもので、その費目は次のとおりとする。

(1) 準備費：準備費は、セミナー開催の準備のために必要な国内外旅費、印刷製本費、通信運搬費、会議費、賃金、消耗品費、雑役務費等とする。

(2) 海外参加者旅費：海外からの参加者旅費は、航空賃、滞在費及び必要な場合は交通費とし、次の基準により援助することができる。①セミナー参加を特に要請する者については、旅費全額 ②その他の参加者のうち必要な者については、旅費の一部

(3) 国内参加者旅費：国内参加者旅費は、交通費（出発地から開催地までの往復鉄道賃等）、日当及び宿泊料とし、次の基準により援助することができる。①セミナー参加を特に要請する者については、旅費全額 ②その他の参加者のうち必要な者については、旅費の一部

(4) セミナー経費：セミナー経費は、セミナー開催期間中に必要な組織責任者等の旅費、印刷製本費、通信運搬費、会議費、レセプション経費、会場使用料、賃金、消耗品費、雑役務費等とする。

本件連絡先：

〒104-0061 東京都中央区銀座3-7-12

公益財団法人 藤原科学財団

TEL (03)3561-7736

FAX (03)3561-7860

<http://www.fujizai.or.jp>

第14回（令和5年度） 日本学術振興会 育志賞候補者推薦依頼

対象分野：人文学、社会科学及び自然科学にわたる全分野

対象者：以下の①②の条件を満たす者を対象とします。

なお、推薦に当たっては、論文等の業績のみにとらわれず、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な者、経済的に困難な状況や研究施設が必ずしも十分ではない等の厳しい研究環境の下でも創意工夫を凝らして主体的に研究を進めている者など多様な観点から推薦願います。

①我が国の大学院博士課程学生（海外からの留学生を含む）であって、当該年度の4月1日において34歳未満の者で、当該年度の5月1日において次の1）から4）のいずれかに該当する者

1）区分制の博士後期課程に在学する者

2）一貫制の博士課程3年次以上の年次に在学する者

3）後期3年のみの博士課程に在学する者

4）医学、歯学、薬学又は獣医学系の4年制博士課程に在学する者

②大学院における学業成績が優秀であり、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいる者

推薦権者：

1）我が国の大学の長（大学長推薦）。推薦数：人文学系、理工系、生物系各2名、その他に分野を問わず1名の計8名まで※ただし各カテゴリの推薦が男性のみの場合は各1名まで

2）我が国の学術団体（日本学術会議協力学術研究団体に限る）の長（学会長推薦）。推薦数：2名まで※ただし推薦が男性のみの場合は1名まで

受付期間：令和5年5月25日（木）～5月30日（火）17:00（締切）

学会推薦を希望される方は、5月12日（金）までに必要書類を揃えて学会事務局までご連絡ください。

自薦・個人推薦の受付はありません。

推薦に関する詳細は、下記よりご確認ください。

<https://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/yoshiki.html>

住友財団 2023年度基礎科学研究助成

助成の趣旨：科学の進歩は社会の発展に大きな貢献を果たしてきました。科学は人類社会の未来を拓くことにつながるものです。この助成は、重要でありながら研究資金が不十分とされている基礎科学研究、とりわけ新しい発想が期待される若手研究者による萌芽的な研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：理学（数学、物理学、化学、生物学）の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの（それぞれの分野における工学の基礎となるものを含む。）

応募資格：

「若手研究者」（個人または研究グループ）

①国籍に関係なく、日本の大学等の研究機関に所属し、申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても、日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は、応募可能です。尚、海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

尚、申請者の所属が営利企業等（兼務を含む）の場合には応募不可です。

助成金：総額1億5,000万円（1件当たり最大500万円）

助成件数：90件程度

募集期間：2023年4月15日（土）～6月30日（金）

応募方法：財団ホームページから応募ページにアクセスし、手順に従って申請書類を作成して、システムにアップロードすることで申請を行って下さい。

連絡先：

〒105-0012 東京都港区芝大門1-12-16 住友芝大門ビル2号館

公益財団法人 住友財団

TEL：03-5473-0161 FAX：03-5473-8471

E-mail：basic.science@sumitomo.or.jp

URL：<http://www.sumitomo.or.jp/>

住友財団 2023年度環境研究助成

助成の趣旨：現在、人類が直面している大きな問題の一つに環境問題があります。地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、生物種の減少、食料と人口、砂漠化、公害等様々な問題があり、その原因の探究と解決策の模索が続けられています。この助成は、環境問題の解決のためには、多面的アプローチによる分析と様々な対応策の構築が必要と考え、そのためのいろいろな観点（人文科学・社会科学・自然科学）からの研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：

・一般研究：環境に関する研究（分野は問いません。）

・課題研究：2023年度募集課題「激動の時代における環境問題の理解および解決のための学際研究または国際共同研究」

応募資格：

研究者個人または研究グループ

①国籍に関係なく、日本の大学等の研究機関に所属し、申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても、日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は、応募可能です。尚、海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

尚、申請者の所属が営利企業等（兼務を含む）の場合には応募不可です。

助成金：総額1億円
一般研究 7,000万円, 1件当たり最大 500万円
課題研究 3,000万円, 1件当たり最大1,000万円
助成件数：
一般研究 40件程度
課題研究 3件程度
募集期間：2023年4月15日（土）～6月30日（金）
応募方法：財団ホームページから応募ページにアクセスし、手順に従って申請書類を作成して、システムにアップロードすることで申請を行って下さい。
連絡先：
〒105-0012 東京都港区芝大門1-12-16 住友芝大門ビル2号館
公益財団法人 住友財団
TEL：03-5473-0161 FAX：03-5473-8471
E-mail：environment@sumitomo.or.jp
URL：http://www.sumitomo.or.jp/

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけますようお願い致します。



弘前大学大学院理工学研究科 (変動地形学・測地学分野准教授) 教員公募

募集職種・人員：准教授 1名
任期：任期なし
所属：大学院理工学研究科（理工学部地球環境防災学科併任及び大学院地域共創科学研究科担当）
専門分野：変動地形学・測地学など、広い意味でのジオダイナミクス
担当科目
・理工学部：空間情報学、空間情報学演習、固体地球物理学、応用物理学実験、卒業研究など
・大学院地域共創科学研究科：専門分野に関連した科目、研究指導に関連した科目など
・教養教育：スタディスキル導入科目、自然・科学科目群、データサイエンス科目群など
採用予定時期：令和5年11月1日（以降のできるだけ早い時期）
応募資格：
(1) 博士の学位を有する、あるいは着任までに取得見込みの方
(2) 大学院博士前期課程において教育・研究指導ができる方
(3) 外国人の場合は、学内諸業務の遂行が可

能な日本語運用能力を有する方
応募期限：令和5年6月8日（木）（17時必着）
問い合わせ先：〒036-8561 青森県弘前市文京町3番地
弘前大学大学院理工学研究科 総務グループ（総務担当）
電話：(0172) 39-3503, FAX：(0172) 39-3513
E-mail: jm3505@hirosaki-u.ac.jp
応募書類、書類提出先など詳細は、下記よりご参照ください。
https://www.hirosaki-u.ac.jp/info/jobs/academic_staff/

京都大学大学院理学研究科附属 地球熱学研究施設准教授公募

職種：准教授
募集人員：1名
所属および勤務場所：京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設・本部（大分県別府市野口原3088）
専門分野：地熱流体論研究分野
勤務内容：地殻内の熱・水・物質の流れに関する研究と教育を、地球物理学的、地質学的あるいは地球化学的に推進する。
資格等：
(1) 博士の学位を有すること
(2) 本研究施設が位置する九州の地熱温泉地域や火山を活かした研究に意欲的に取り組むこと
(3) 学部および大学院の教育に意欲的に取り組むこと
(4) 地域社会貢献、アウトリーチ活動に積極的に取り組むこと
(5) 野外における観測や調査に従事できること
着任時期：採用決定後、できるだけ早い時期
任期：なし
試用期間：あり（6か月）
出産、育児又は介護により研究を中断した期間がある場合は、研究業績の審
応募締切：2023年6月9日（金）18:00（郵送等の場合は必着）
書類送付先および問い合わせ先：
〒869-1404 熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陽 5280
京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター 大倉敬宏
電話 0967-67-0022, FAX 0967-67-2153
e-mail: ohkura.takahiro.2s@kyoto-u.ac.jp
詳細は、下記をご参照ください。
<http://www.vgs.kyoto-u.ac.jp/JPN/recruit/koubo20230327.pdf>

福岡大学理学部地球圏科学科 地球科学分野公募（古生物：助教）

1. 公募職および人数：助教 1名

2. 所属：福岡大学理学部地球圏科学科 地球科学分野
3. 採用予定時期：2024年1月1日（もしくはそれ以降のできるだけ早い時期）
4. 任期：なし（定年63歳）
5. 専門分野：古生物学を中心に他の地球科学的研究手法を組み合わせた、地球史、生物相変遷、地球環境変遷に関する研究分野
6. 応募資格：次の条件を共に満たす方
(1) 着任時に博士あるいはPh.D.の学位を有する方
(2) 上記の専門分野において優れた研究業績を有する方
(3) 野外調査経験を有し、野外における教育・指導ができる方
(4) 教育・研究および必要な業務に他の教職員と協調して取り組める方
(5) 学内諸業務を遂行できる日本語運用能力を有する方
7. 担当科目など
(1) 学部の基礎実験科目、野外演習、野外実習の担当および担当補助
(2) 卒業研究の担当補助
(3) 学科内、分野内の運営関連業務
8. 応募締切：2023年5月31日（水）必着
9. 提出書類
(1) 履歴書（様式なし）
(2) 業績リスト（様式なし）
(3) 主な論文5編以内の別刷（コピー可）
(4) 教育業績書（様式なし）
(5) 科研費などの競争的研究資金の獲得状況（様式なし）
(6) これまでの研究概要（2000字程度）
(7) これからの研究および教育活動の抱負（2000字程度）
(8) 応募者本人について意見を伺える方2名の氏名と連絡先
10. 書類送付先および問い合わせ先：
〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1
福岡大学理学部地球圏科学科地球科学分野教授 上野勝美
Eメール: katsumi@fukuoka-u.ac.jp
応募方法等詳細については以下のホームページを参照してください。
<https://www.sci.fukuoka-u.ac.jp/earth/index.html>

福岡大学理学部地球圏科学科 地球科学分野公募 (地球物質科学：助教)

1. 公募職および人数：助教 1名
2. 所属：福岡大学理学部地球圏科学科地球科学分野
3. 採用予定時期：2024年4月1日
4. 任期：なし（定年63歳）
5. 専門分野：地球物質科学（本公募では、地殻構成物質や地殻流体の循環、変動、相互作用などについて、物質科学的手法を用いて

研究を推進する人材を求めます)

6. 応募資格: 次の条件を共に満たす方
(1) 着任時に博士あるいはPh.D.の学位を有する方

(2) 上記の専門分野において優れた研究業績を有する方

(3) 十分な野外調査経験を有し、野外における教育・指導ができる方

(4) 教育・研究および必要な業務に他の教職員と協調して取り組める方

(5) 学内諸業務を遂行できる日本語運用能力を有する方

7. 担当科目など

(1) 学部の基礎実験科目、野外実習、野外演習の担当および担当補助

(2) 卒業研究の担当補助

(3) 学科内、分野内の運営関連業務

8. 応募締切: 2023年6月30日(金) 必着

9. 提出書類

(1) 履歴書(様式なし)

(2) 業績リスト(様式なし)

(3) 主な論文5編以内の別刷(コピー可)

(4) 教育業績書(様式なし)

(5) 科研費などの競争的研究資金の獲得状況(様式なし)

(6) これまでの研究概要(2000字程度)

(7) これからの研究および教育活動の抱負(2000字程度)

(8) 応募者本人について意見を伺える方2名の氏名と連絡先

10. 書類送付先および問い合わせ先:

〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1

福岡大学理学部地球圏科学科地球科学分野

教授 柴田智郎

Eメール: shibatat@fukuoka-u.ac.jp

応募方法等詳細については以下のホームページを参照してください。

<https://www.sci.fukuoka-u.ac.jp/earth/index.html>

東京工業大学科学技術創成研究院 多元レジリエンス研究センター 火山・地震研究部門助教公募

募集職種: 助教(任期5年, 再任1回 可5年以内)

人数: 1名

分野: 火山学およびそれに関連する分野

勤務地: 大岡山キャンパスあるいは草津白根火山観測所

募集締切: 2023年5月31日(必着)

応募方法: JREC-IN応募

(注) 東京工業大学理学院火山流体研究センターは、科学技術創成研究院多元レジリエンス研究センターの火山・地震研究部門に改組されました(2023年4月1日)。

問い合わせ先:

東京工業大学科学技術創成研究院

多元レジリエンス研究センター 火山・地震

研究部門

小川康雄<ogawa.y.aa@m.titech.ac.jp>

詳しくは、

https://jrecin.jst.go.jp/seek/SeekJorDetail?n=1&id=D123040089&ln_jor=0



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

ワークショップ: 掘削と モニタリングによる海山沈み込み とスロー地震の関係の解明

日向灘における海山沈み込みとスロー地震の関係解明に迫ろうとするIODP掘削計画が採択されました。これを受けまして、日向灘掘削計画のリードプロポーネントで、「掘削とモニタリングによる海山沈み込みとスロー地震の関係の解明」を目指すワークショップを開催することにいたしました。日向灘にとどまらず、海山沈み込みのみられる他の沈み込み帯との比較、海山沈み込みに関連するスロー地震以外の現象等について広く議論する場とし、海山沈み込みに興味を持つ研究者のコミュニティ醸成の場となることを期待しています。なお、本ワークショップは日本学術振興会科研費学術変革領域研究(A)Slow-to-Fast地震学のA01、A02班との共催となります。ご都合のつく方は奮ってご参加ください。

日時: 2023年5月27日(土) 9:00から

場所: 東京大学地震研究所1号館2Fセミナー室(対面、ハイブリッド)

人数把握のため、ホームページより参加登録をお願いいたします。

問い合わせ: 橋本善孝(高知大学) [hassy\(at\)kochi-u.ac.jp](mailto:hassy(at)kochi-u.ac.jp)

参加登録および詳細は、http://www.cc.kochi-u.ac.jp/~hassy/WS_SS/

日本学術会議公開シンポジウム 「有人潜水調査船の未来を語る」

日時: 令和5年6月17日(土) 13:00~17:00

場所: 日本学術会議講堂(オンライン配信ハイブリッド)

主催: 日本学術会議地球惑星科学委員会 SCOR分科会/同 基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同 海洋生物学分科会/同 総合工学委員会・機械工学委員会合同 フロンティア人工物分科会

後援: 日本地質学会ほか

一般参加可、参加費不要

趣旨: 1971年から1980年の10年間「国際海洋調査の10年(International Decade of Ocean Exploration)」が国連で決議され、この期間に世界や日本における海洋科学技術は目覚ましく進展した。深海を探索する学術研究目的の有人潜水調査船の開発が同時に進行し、日本における深海研究は飛躍的に発展してきた。やがて、欧米を中心に民間主導の有人潜水船の開発・運用が活発となるものの、日本ではその機運は乏しいまま、現在に至っている。日本における有人潜水調査船はどうあるべきか、コミュニティの意見を広く集め、有人潜水調査の学術的な意義を明確にすることが重要である。加えて、科学者のみならず社会や国民の支持を集めることも同時に重要である。本シンポジウムでは、日本学術会議主催のもと関連する学協会に共催していただきながら、多様なステークホルダーの参加を促し、活発な議論を行いたい。

第一部: 有人潜水調査船と自然科学研究

講演1: 世界と日本の有人潜水船の歴史 高川真一(東京大学)

講演2: 有人潜水調査船「しんかい6500」の操作性・機能性、無人機との比較 飯島さつき(日本海洋事業)

講演3: 潜航調査に立脚した地球科学研究の発展 道林克禎(名古屋大学)

講演4: 潜航調査に立脚した生命科学研究の発展 高井 研(海洋研究開発機構)

第二部: 人間の感性、世界の機械化、自然科学研究

話題提供1: 科学技術社会論: 機械化と直感、機械のperformability(仮) 日比野愛子(弘前大学)

話題提供2: 心理学: 体験、感性、人間の創造性(仮) 山田 祐樹(九州大学)

話題提供3: 科学技術史(仮) 多久和理実(東京工業大学)

パネルディスカッション 司会 川口慎介(連携会員, JAMSTEC)

問い合わせ: 東京大学大気海洋研究所 教授 沖野郷子

(日本学術会議連携会員, SCOR分科会)

okino@aori.u-tokyo.ac.jp

<https://www.scj.go.jp/ja/event/index.html>



博物館・ジオパークで地球を学ぼう！（16）
大阪市立自然史博物館

大阪の「自然の情報拠点」として

大阪市立自然史博物館 中条武司

大阪市立自然史博物館の歴史と「自然史」

大阪市立自然史博物館（写真1）は、大阪市東住吉区にある長居公園の中にあります。長居公園は、陸上の国際大会が行われるヤンマースタジアムやJリーグのセレッソ大阪のホームグラウンドであるヨドコウ桜スタジアムがある場所として知られていますが、その一角にある長居植物園内に当館はあります。

当館のスタートは1950年、大阪市立自然科学博物館として、大阪市天王寺区にある大阪市立美術館2階の廊下の片隅に、ケースを何台か並べて展示することからはじまりました。その後、1958年に大阪市西区にあった旧鞠小学校に移転したのち、1974年に現在の長居公園に移り、館名を現在の「大阪市立自然史博物館」に変えオープンしました。2001年には博物館本館に隣接して、新たな展示室と特別展を開催する「ネイチャーホール」、そして収蔵庫を備えた「花と緑と自然の情報センター」が建設され現在にいたります。

当館は「大阪市立」という名を冠していますが、現在、その運営は地方独立行政法人大阪市博物館機構が担っています。大阪市博物館機構は、日本唯一の地方独立行政法人による博物館運営機関として2019年に設立されました。大阪市博物館機構は、当館だけでなく、歴史系、美術系、科学系など6つの博物館を管理運営し、博物館の継続的な活動や機能強化に取り組んでいます。

ところで、館名に付された「自然史」という言葉ですが、旧来の「博物学」に代わる“Natural History”の訳語で、自然を発展史的に捉え、人と自然の関わりや在り方を探求することこそ“Natural History”の現代的

課題であるという考えに沿い、当時の学芸員であった千地万造氏や日浦勇氏らが考えたものです。当館からはじまったこの「自然史」という言葉は全国に広がり、生物学・地質学・古生物学を扱う博物館の一カテゴリーとして認識されるようになっていきます。

展示を通じて大阪の自然を学ぶ

長居植物園を抜け当館に向かうと、3頭の大きなクジラの骨格標本が目に入ります（写真1）。ナガスクジラ、マッコウクジラ、ザトウクジラの3頭のクジラたちは、いずれも大阪湾に漂着したものを標本にしたもので、来館者に大阪という大都会も海を通じて自然とつながっていることを感じてもらうようになっています。

クジラの下をくぐり本館に入ると、まずは大きな吹き抜けのホールでナウマンゾウとヤベオオツノジカが出迎えてくれます（写真2）。ナウマンホールと呼ばれるこのホールは、当館の展示コンセプトを表現した展示となっています。大阪にナウマンゾウやヤベオオツノジカがいた最終氷期は、人類が大阪に移り住んできた時代と重なります。つまり、大阪の自然はここから人と関わりはじめたことを表しています。

博物館本館の展示は、ナウマンホールに加え、4つの展示室と2階廊下ギャラリーからなります。4つの展示室はそれぞれ第1展示室「身近な自然」、第2展示室「生命と地球の歴史」、第3展示室「生命の進化」、第5展示室「生き物のくらし」からなります。第4展示室がないのではと思われるかもしれませんが、第4展示室は「自然のめぐみ」というコーナ

写真1 長居植物園から見た大阪市立自然史博物館。3頭のクジラが大阪が海を通じて世界の自然とつながっていることを実感させてくれる。向かって左側が博物館本館、クジラを挟んで右側が花と緑と自然の情報センター。

info

大阪市立自然史博物館

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23

Tel : 06-6697-6221

URL : <http://www.omnh.jp/>

ーで、2階ギャラリーの一角を占めています。ここでは特に地質学に関わる第2展示室「生命と地球の歴史」について紹介します。

第2展示室に入ると、中央の展示台にナウマンゾウやマチカネワニ、恐竜など様々な骨格標本がずらりと並んでいるのが目に入ります（写真3）。この中央の展示台にある大型の骨格標本は周囲の壁面の展示説明がつかないようにになっており、詳しい時代背景を壁面の展示で学び、その時代を象徴する大型化石を中央展示台で見るという作りになっています。そして展示を見ていくと、その順序が多くの同様の博物館とは異なり、新しい時代（第四紀）から古い時代へとさかのぼっていくのがわかります。これは現在の大阪の自然がどのように成り立ってきたかを表現するために、現在と近い時代から自然が移り変わっていく様子を知ってもらうために、このような順序となっています。

この展示室、いや博物館の人気展示といえは恐竜を外すことはできません。しかし、全身復元骨格であるアロサウルスが、直立したいわゆる「ゴジラ型」の姿勢での復元となっているのがわかります（写真3）。これは1974年に自然史博物館がオープンしてから、大規模な展示の更新がされておらず、現在の知見が復元姿勢に反映されていないためです。当館全体にいえることですが、小規模な展示更新は行われているものの、根本的な展示のリニューアルは開館以降されていません。展示の更新は私たち学芸員にとっての悲願です。特にアロサウルスの姿勢の更新はぜひとも急いで行いたいと考えており、博物館ではアロサウルスの新復元骨格導入に対する寄附金を

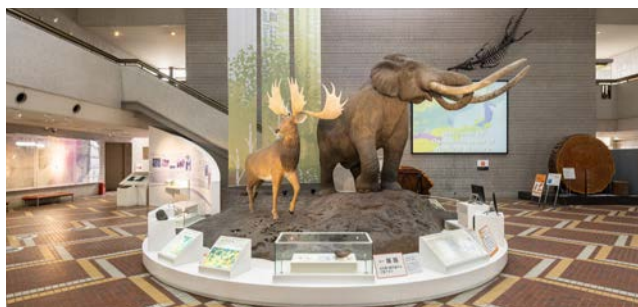


写真2 ナウマンホール。ナウマンゾウとヤベオオツノジカが出迎えてくれる。



写真3 第2展示室全景。正面右側のアロサウルスは「ゴジラ型」の姿勢の復元となっている。

募っています (<http://www.omnh.jp/2about/kifu.html>)。

博物館本館の向かい側に建つ「花と緑と自然の情報センター」には、大阪の地域ごとの地質や生物相を展示した「大阪の自然誌」展示室があり、大阪のどこに行けばどんな岩石や生物が見られるかが、一目でわかるようになっています (中条, 2020)。2階のネイチャーホールでは様々な特別展が開催されます。特別展は当館が独自に企画したものと、マスコミなどとの共催で実施するものがあります。現在は後者のものとして特別展「毒」が開催されています (5月28日まで, <https://www.ktv.jp/event/dokuten/>)。そして、この夏には現在国立科学博物館で開催中の「恐竜博2023」が開催予定です (<https://dino2023.exhibit.jp/>)。

収蔵標本

当館の収蔵標本は「花と緑と自然の情報センター」地下にある収蔵庫に保管されています。2021年度末の時点で、当館の収蔵標本数は1,926,963点で、そのうち地質系の標本は71,960点です。全国の博物館に共通の課題ですが、200万点に迫る収蔵標本によって2001年に新しくできた (といっても20年以上前) 収蔵庫はすでに満杯の状態になっており、新規の大型コレクションの受入が困難になっています。新しい収蔵庫の建設や増床、収蔵品の整理に関わる人的・金銭的な充実が、博物館の標本収集活動の課題となっています。

以下に地質学分野を代表するコレクションについて解説します。

三木 茂コレクション

大阪市立大学名誉教授であり、メタセコイアの発見者としても知られる三木茂博士のコレクションが当館に収蔵されています。三木茂博士が収集した植物および植物化石を中心としたコレクションは、植物化石標本約25,000点、現生植物標本約7200点などになり

ます (粉川ほか, 2006)。そのうちメタセコイア化石標本457点は、大阪市指定文化財となっています (写真4)。

中生代軟体動物化石

愛媛県から大阪府南部にかけて分布する和泉層群からは、アンモナイトや二枚貝をはじめとした軟体動物化石が数多く産出します。これらと和泉層群を中心とした中生代軟体動物化石が数多く収蔵されています。これらの中には *Gaudryceras izumiense*, *Patagiosites laevis*, *Pachydiscus awajensis* などのタイプ標本を含みます。これらの標本の一部は、3D画像として3Dデータの公開・共有サイトであるSketchfab (スケッチファブ) に公開しています (<https://sketchfab.com/OMNH>)。

大阪平野ボーリングコア

大阪平野やその周辺では、地盤沈下対策や1995年の兵庫県南部地震後の活断層・地質構造調査のために深度200mを超えるボーリング調査が数多く実施されました。それらのうち、津守、大手前、浜、夕陽丘ボーリングコア (吉川ほか, 1997; 吉川ほか, 1998) などを収蔵しています。

大阪平野地下から産出したクジラ・貝化石

地下鉄やビル建設に伴う工事に際して大阪平野地下から産出した更新世～完新世の化石です。化石としては世界初記録のカツオクジラ (Tanaka and Taruno, 2017) をはじめとして、ザトウクジラ、ナガスクジラ類などのクジラ化石、現在の大阪周辺では見られないチリメンユキガイやビョウブガイなどの貝化石 (石井, 1987; 1993) が含まれます。

熊石洞産哺乳類化石標本

岐阜県郡上市にある石灰岩洞窟である熊石洞から採集された後期更新世の脊椎動物化石群1,100点あまりです (樽野ほか, 2019)。トラ、ヒグマ、ナウマンゾウ、ニホンカモシカ、ヘラジカ、ヤベオオツノジカ、カズサジカなど、当時の日本列島の哺乳類の多様性を示す標本です。

日本一活動的!? 自然史博物館の普及教育行事

当館の特徴として、とても活発な普及教育活動があげられます。コロナ禍によりこの数年はその活動は停滞してきましたが、2022年度の行事数は年間200回を超え、コロナ禍以前に戻りつつあります。その内容も野外での観察会、室内実習、講演会、子どもたちを対象としたワークショップと多種多様です。また、コロナ禍をきっかけに講演会のほとんどが対面・配信のハイブリッド開催となっており、自然史博物館のYouTubeチャンネルを通じて配信されます (<https://www.youtube.com/c/大阪市立自然史博物館/>)。

地質系の行事としては毎年恒例の化石さがしや地域の地質の観察会、室内での地学実習などが行われています。これらの行事の一部では、地質学会近畿支部や地学団体研究会大阪支部などと共催で実施することもあり、各種学会のアウトリーチ活動に役買っている面もあります。近いところではこれらの学会

との共催で5月14日に「地質の日」協賛行事の地球科学講演会が開催されます (地質学会 News4月号に詳細掲載)。

当館は友の会活動を中心とした市民と共にを行う活動も重視しています。友の会の会員数は大阪を中心に全国1600世帯近く (2022年末)、友の会会誌であるNature Studyは通巻で800号を超えています。友の会会員を中心とした自然環境の市民調査 (市民科学) にも熱心に取り組んでおり、今年度からは大阪・奈良を流れる大和川水系の自然を市民と共に調べ、数年後の特別展開催に向けて取り組みはじめたところです。筆者も現在「いけず石調査」と銘打った市民調査を実施しています (<https://sites.google.com/view/ikezuishishirabe/>)。これらの活動は博物館がただ自然科学を伝えることだけでなく、自然科学を学ぶ楽しさを伝えていきたいという、当館の理念を表現しているものといえます。これらの活動の集大成として、毎年秋には大阪周辺の自然観察団体や自然保護団体、自然科学系学会、NGO・NPOなどが集う大阪自然史フェスティバルを開催しています。

また、ミュージアムショップでは、非常に特色のあるオリジナルグッズも多数販売しており (<https://omnh-shop.ocnk.net/>)、某テレビ番組でも紹介されたほどです。ミュージアムグッズはただのおみやげではなく、博物館や自然への興味も持って帰ってもらおうという、普及教育活動の一環として博物館では取り組んでいます。

むすび

紙面の都合で博物館の研究活動についてはほとんどふれることができませんでしたが、学芸員の研究活動がベースとなって展示・普及教育・資料収集保管が行われていることはいうまでもありません。一方で、博物館への来館や観察会・講演会などに参加する方々、友の会会員など、多くの市民と向き合うことで当館の活動は成り立っています。これらの活動を通じて、市民には博物館に来て終わりではなく、家の周りなど身近な場所から世界中にいたるまで、様々な自然に触れてもらい、その楽しさを感じてもらえることができるように、私たちは活動しています。

引用文献

石井久夫, 1987, 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第19集.; 石井久夫, 1993, 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第25集.; 粉川昭平ほか, 2006, 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第38集.; 中条武司, 2020, 博物館研究, 55, 21-24. Tanaka, Y. and Taruno, H., 2017, Palaeontologia Electronica, 20.350A, 1-13. 樽野博幸ほか, 2019, 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第50集.; 吉川周作ほか, 1997, 地調月報, 48, 661-672.; 吉川周作ほか, 1998, 地質雑, 104, 462-476.



写真4 メタセコイア化石のプレパラート標本 (三木茂コレクション)。大阪市の指定文化財となっている。

★惑星地球フォトコンテスト

第14回ほか入選作品展示会

日程：2023年5月16日（火）午後～5月28日（日）14時まで

場所：東京パークスギャラリー（上野グリーンサロン内）（台東区上野公園JR上野駅 公園改札出てすぐ）

入場無料、どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。

入選作品の画像や講評は近日学会HPに掲載予定です。

問い合わせ先：日本地質学会事務局 main@geosociety.jp



★街中ジオ散歩

街中ジオ散歩in Yokohama

「身近な地形・地質から探る横浜の歴史」

主催：（一社）日本地質学会、（一社）日本応用地質学会、神奈川県立生命の星・地球博物館

日時：2023年5月14日（日）

見学場所：横浜市（京急東神奈川～JR桜木町）

主な見学地点と見どころ：「東神奈川周辺の台地と明治初期の領事館跡」～「横浜防災センター」～「横浜市街地の埋め立てと干拓」～「掃部山周辺の石垣と湧水」

※参加申込受付は終了しました。

問い合わせ先（メールにてお願いします）：

日本地質学会関東支部（担当 細矢）mail:hosoya@cknet.co.jp

★オンライン普及講演会

日本列島の地質探訪

—古生代から新生代まで

日本地質学会では、広く一般に地質学の魅力と重要性を知っていただくため、毎年、5月10日の「地質の日」を記念した様々な行事を実施しています。本年は、各地のジオパーク拠点博物館に協力いただき、オンラインで各施設の展示や地域の露頭等を紹介することで、聴講者が自宅にいながらにして各地の地質の魅力に“触れ”、日本列島の地質の多様性に“触れる”機会とします。

日程：2023年5月13日（土）9:30～12:05

主催：日本地質学会

実施方法

- ・Zoomを用いたオンライン形式で3施設の登壇者がリレーで講演（1題40分程度）。
- ・参加者はYouTubeライブでの参加。後日オンデマンドでの配信も行う。
- ・スライドでの講演だけでなく、可能であれば展示室や露頭からの中継なども推奨する。

スケジュール

9:30～9:35 ご挨拶 岡田 誠（日本地質学会会長）

9:35～9:40 概要説明

9:40～10:20 講演1「四国西予ジオパークと黒瀬川帯」

四国西予ジオミュージアム（高橋司館長・榊山匠学芸員）
日本最古級の岩石や地層を特徴とする「黒瀬川構造帯」。それらはジュラ紀の付加体である「秩父帯」の中に断続的に細長く分布していますが、その成り立ちについては謎が多く、研究者による見解も分かれています。今回は黒瀬川帯研究発祥の地である西予市から、「黒瀬川帯」をキーワードとして四国西予ジオパークやジオミュージアムを紹介します。

（休憩）

10:30～11:10 講演2「銚子半島をつくった孤独でふしぎな中生代の地層」

銚子ジオパークミュージアム（岩本直哉主任学芸員・上田脩郎主任学芸員）
犬吠埼灯台で有名な銚子の東海岸。ここには局所的に中生代の付加体、前孤海盆堆積物が露出します。これらの基盤岩の存在により、銚子は半島となり、銚子ならではの風土が形成されました。このように銚子の礎となった中生代の地層や産出する化石を中心に銚子の地質の魅力を銚子ジオパークミュージアムよりご紹介いたします。

（休憩 11:10～11:20）

11:20～12:00 講演3「糸魚川からフォッサマグナと日本列島誕生の謎に迫る」

糸魚川フォッサマグナミュージアム（小河原孝彦学芸員・香取拓馬学芸員・茨木洋介学芸員・郡山鈴夏学芸員）
糸魚川ユネスコ世界ジオパークの拠点施設・フォッサマグナミュージアムと、代表的なジオサイトであるフォッサマグナパークから、日本列島の生い立ち、大地の生い立ちと、日本酒など私たちの暮らしの深い関わりを紹介します。断層と日本酒にいったいどんな関係があるのか気になったそのあなた、ぜひお聞き逃しなく。

12:00～12:05 終わりの挨拶

★近畿支部：講演会

第40回地球科学講演会「日本海拡大時の日本列島の変動—地質と古地磁気の研究からどこまでわかっているか—」

近畿支部では、地学団体研究会大阪支部・大阪市立自然史博物館と共催で、「地質の日」協賛行事として5月14日（日）に星

博幸氏（愛知教育大学）を講師に迎え、「日本海拡大時の日本列島の変動—地質と古地磁気の研究からどこまでわかっているか—」を開催します。対面での聴講に加え、YouTubeでの配信も予定しています。多くの方のご参加をお待ちしております。「日本海拡大時の日本列島の変動—地質と古地磁気の研究からどこまでわかっているか—」

日本海拡大時に、日本列島はどのように大陸から移動してきたのでしょうか。その時、日本列島はどのような変動を受けたのでしょうか。これまで日本海は1500万年前頃に拡大したと考えられていましたが、最近の研究によって拡大はもう少し前に起こり、1500万年前には拡大がほとんど終わっていたことがわかってきました。また、日本海拡大時に日本列島の地殻が広い範囲で変形したことや、拡大直後に西日本太平洋側で一斉にマグマ活動が起こったことなどもわかってきました。本講演会ではこれらの問題について、地質と古地磁気の初歩の解説も交えながら、最新の研究成果を解説します。

日時：2023年5月14日（日）14:00～16:00

講師：星 博幸氏（愛知教育大学教授）

場所：自然史博物館本館 講堂（YouTubeを使った同時配信も行います）

定員：講堂での聴講：150名（定員を超えた場合は抽選）

対象：講堂での聴講：どなたでも参加できます（小学生以下は保護者同伴）。ただし申込が必要。

ネット配信：インターネットに接続することができる方

申込締切：5月1日（月） 申込方法については、大阪市立自然史博物館ホームページ（<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/>）のイベントページをご覧ください。※YouTubeを使った配信での聴講をご希望の方は、申込不要です。

配信・接続方法：YouTubeを使った配信を予定しています。 YouTubeの「大阪市立自然史博物館」チャンネル（<https://www.youtube.com/c/大阪市立自然史博物館/>）にアクセスして表題の番組をクリックしてください。開始時間にれば始まります。

参加費：無料（博物館での聴講の場合は博物館入館料が必要）

主催：地学団体研究会大阪支部・日本地質学会近畿支部・大阪市立自然史博物館

その他：6月18日（日）まで見逃し配信を行います。同時配信を見られない人はご覧ください。

★西日本支部：企画展示

第15回「地質の日」企画 身近に知る「くまもとの大地」

日時：2023年5月21日（日）10:00～16:00

主催：「地質の日」くまもと実行委員会

共催：日本地質学会西日本支部ほか

内容：2008年から毎年、熊本県内の大学や博物館、民間の地質学協会などの地質関連団体が合同で「地質の日」のイベントを開催しています。今回は熊本市にある熊本博物館を会場に、熊本の大地をテーマとした展示や、地質学に関連する楽しい体験イベントを行います。

- ・おどろきの展示コーナー：熊本の地質、岩石、火山、恐竜やアンモナイトなどの化石、熊本県の自然災害に関する展示。
- ・わくわく体験コーナー：化石レプリカづくりやパンニングで

の鉱物採集、カルデラ形成実験など、地学を楽しく学べる体験。

場所：熊本博物館（熊本県熊本市中央区古京町3-2）

費用：博物館入場料のみ、大人400円（320円）、

高・大生300円（240円）、中学生以下200円（160円）※（ ）は団体料金。未就学児は無料。

申込不要。当日直接会場へお越しください。

問い合わせ先：熊本博物館（地質担当：南部靖幸）

〒860-0007 熊本市中央区古京町3-2

TEL：096-324-3500

FAX：096-351-4257

E-mail：nambu.yasuyuki@city.kumamoto.lg.jp



★四国支部：体験会

化石発掘体験～化石レプリカを見つけてみよう！～

5月10日は地質学に関する理解を推進させることを目的に制定された「地質の日」である。近年、愛媛県では、道後姫塚で県初の首長竜化石が発掘され、数多くのメディアで取り上げられることにより、古生物学および地質学への関心が高まっています。本企画では、レプリカを用いた化石発掘体験を通して小学生やその保護者に化石および地質や岩石に興味を持ってもらい、地質学に関する理解を深めてもらうことを目的としています。

日時：2023年5月13日（土）13:00-16:30

主催：愛媛大学理工学研究科地球進化学コース院生会

共催：日本地質学会四国支部・愛媛大学理学部地学コース、大学院理工学研究科地球進化学講座、愛媛大学ミュージアム

会場：愛媛大学ミュージアム・オープンテラス（愛媛県松山市文京町3 愛媛大学城北キャンパス）

参加費：無料

事前申込不要（当日会場に直接ご来場下さい。13:00-16:00まで受付）

問い合わせ先：

メール：ehime.chishitunohi@gmail.com（代表：下岡和也）

電話：089-927-9623（愛媛大学理学部地学コース事務局）

★その他

観察会「観音崎の地層と関東大震災の傷跡をたどる」

観音崎は海底に堆積した地層が隆起してできました。その過程でできた傾斜した地層や断層、そして海底地すべりの痕跡など様々な地層があります。これらの観察を通して、大地の成り立ちを学んでいきます。また、関東大震災の傷跡も辿っていきます。

主催：三浦半島活断層調査会

後援：日本地質学会 ほか

日時：令和5年6月4日（日）10:00～15:00頃（小雨決行）
集合場所：観音崎バス停（10時集合）
観察コース：観音崎バス停～灯台下海岸～灯台入口～たたら浜
園地 展望園地～観音崎バス停
募集人員：先着 30 名
参加費：500 円（資料代・保険代）
持ち物：弁当・飲み物・雨具 歩きやすい靴で ご参加ください。

申込：郵便番号・住所・氏名（フリガナ）・年齢・電話番号を記載し、往復葉書またはメールで5月20日までに下記あてにお申込みください。
申込先：三浦半島活断層調査会事務局（青木厚美方）
〒247-0056 鎌倉市大船4-21-5-603
電話 080-1193-5179, Eメール atsumi-aoki@mcko.jp

CALENDAR

2023.5～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、（共）共催、（後）後援、（協）協賛。

2023年

5月 May

ワークショップ：掘削とモニタリングによる海山沈み込みとスロー地震の関係の解明

5月27日（土）9:00～

場所：東京大学地震研究所1号館2Fセミナー室（対面&ハイブリッド）

※要参加申込

問い合わせ：橋本善孝（高知大学）hassy@kochi-u.ac.jp

http://www.cc.kochi-u.ac.jp/~hassy/WS_SS/

6月 June

地質学史懇話会

6月10日（土）13:30～17:00

場所：早稲田奉仕園（オンラインとハイブリッド）

小澤健史「ドイツ・ハーツ鉱山とドイツ系日本人ペーター・ハーツィング」

今村遼平「中国地図測量史」続

問い合わせ：矢島道子 pxi02070[at]nifty.com

（後）日本学術会議公開シンポジウム「有人潜水調査船の未来を語る」

6月17日（土）13:00-17:00

場所：日本学術会議講堂（オンライン配信ハイブリッド）

後援：日本地質学会ほか

一般参加可、参加費不要

<https://www.scj.go.jp/ja/event/index.html>

7月 July

第4回国際黒曜石会議

International Obsidian Conference(IOC) Engaru 2023

7月3日（月）-6日（木）

開催地：北海道紋別郡遠軽町

<https://sites.google.com/view/iocengaru2023/home>

（後）第60回アイソトープ・放射線研究発表会

7月5日（水）～7日（金）

会場：東京都内会場（予定）

<https://confit.atlas.jp/guide/event/jrias2023/top>

8月 August

（共）岩石-水相互作用（WRI-17）または応用同位体地球化学（AIG-14）合同国際会議

8月18日（金）～22日（火）

会場：仙台国際センター

<https://www.wri17.com/>

WCFS2023 Japan：Floating Solutions for the Next SDGs

8月28日-29日：論文発表等

8月30日：テクニカルツアー

場所：日本大学理工学部（東京都千代田区神田駿河台）（予定）

<https://wcfs2023.nextsdgs.org/>

9月 September

★日本地質学会第130年学術大会（2023京都）

9月17日（日）-19日（火）

会場：京都大学

2023年防災推進国民大会（ぼうさいこくたい）

9月17日（日）-18日（月・祝）

場所：横浜国立大学（横浜市保土ヶ谷区常盤台）

<https://bosai-kokutai.jp/2023/>

2023年度日本地球化学会 第70回年会

9月21日（木）～23日（土）

開催場所 東京海洋大学品川キャンパス会場（一部ハイブリッド）

口頭発表（ハイブリッド）、ポスター発表（対面）

<http://www.geochem.jp/meeting/>

10月 October

（協）Techno-Ocean 2023

10月5日（木）～7日（土）

会場：神戸国際展示場2号館 ほか

<https://to2023.techno-ocean.com/>

国際 Gondwana 研究連合 (IAGR) 2023年総会及び第20回 Gondwana からアジア国際シンポジウム

10月8日～9日（シンポジウム）

10月10日～11日（糸魚川ユネスコ世界ジオパーク野外巡検）

会場：新潟大学中央図書館ライブラリーホール（新潟市西区五十嵐2の町8050）

問い合わせ：M. Satish-Kumar, iagr2023@geo.sc.niigata-u.ac.jp



5月10日は

地質の日



5月10日を中心に全国でイベント開催

地質の日事業推進委員会事務局

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター

TEL : 029-861-3540 E-mail : geologyday-jimu-ml@aist.go.jp

Web : <https://www.gsj.jp/geologyday/>

地質の日事業推進委員会：（一社）日本地質学会、（一社）日本応用地質学会、（一社）日本鉱物科学会、資源地質学会、日本堆積学会、日本古生物学会、日本第四紀学会、日本情報地質学会、（独）国立科学博物館、全国科学博物館協議会、神奈川風立生命の星・地球博物館、（国研）産業技術総合研究所、日本科学未来館、（地独）道総研エネルギー・環境・地質研究所、（公社）東京地学協会、（一社）全国地質調査業協会連合会、（NPO 法人）日本ジオパークネットワーク、大阪市立自然史博物館、（公財）阿蘇火山博物館、兵庫県立大学大学院地惑資源マネジメント研究科（※不同：2023年2月現在）

撮影地：千葉県屏風ヶ浦 題字：高橋須葉



第14回 惑星地球フォトコンテスト審査結果

今年の応募総数は348点、3年間続いたコロナ禍のため、応募はほとんどが国内で撮影された作品となりました。また今回は3年ぶりのリアルでの審査会となりました。残念ながら今年は審査員一同がこれだ！といえる突出した作品はありませんでしたが、全体的にレベルが上がり、また適切な解説付の作品が増えてきたのは良い傾向です。解説によってジオフォトの作品がより生きてきます。ドローンで撮影した作品も増えてきましたが、世の中にはドローンの映像が溢れています。見る側の目も肥えてきたので、応募作品は気合いを入れて撮影することが望まれます。1000万画素以上のカメラ付スマホの応募も増えてきました。気軽に撮影できるのがスマホの良い点ですが、構図や露出等に細心の注意を払いながら撮影してほしいと思います。

ジオフォトはまだ未開拓の要素が多く、大きな可能性を秘めているはずです。来年もより地質や地形に愛を感じられるレベルの高い作品の多数の応募を期待します。

総評：審査委員長 白尾元理（写真家）

撮影場所：長崎県平戸市生月島 塩俵断崖

審査委員長講評：この作品はドローンを使って柱状節理を撮影したものです。地上からの撮影では柱状節理の上面の六角形だけ、あるいは柱状だけとなりがちですが、ドローンを適切に配置して上面も側面も捉えています。しかも海中にも柱状節理の六角形がたくさん写っています。海面の青緑、白波、玄武岩の褐色、草の緑と色のコントラストも見事です。

最優秀賞：古代の双六
撮影者：朝永武志（長崎県）



第14回惑星地球フォトコンテスト 作品展示会

日程：2023年5月16日（火）午後～ 5月28日（日）15時頃まで

場所：東京パークスギャラリー（上野グリーンサロン内）（台東区上野公園）

入場無料、どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。



優秀賞：大西洋と砂漠
撮影者：近藤 洋（兵庫県）

撮影場所：ナミビア

審査委員長講評：ナミブ砂漠はナミビア西海岸に広がる大砂漠で、大きな砂丘は高さ 300 m もあります。この砂漠の広がりを書すにはドローンでは無理で、作者は観光用のセスナから撮影しています。この作品を 2013 年撮影のやや古いものですが、現在ではこのような辺境さえもツアーで容易に行けるようになりました。やや彩度を強調しすぎた感がありますが、インパクトの強い作品となっています。

優秀賞：Lingshed Village
撮影者：佐藤竜治（静岡県）

撮影場所：インド ザンスカール地方 リンシェ村
 審査委員長講評：撮影地はインド最北部でパキスタン・中国との国境間近、ヒマラヤ山系のインダス川源流に近い秘境です。滑らかな山腹と谷壁にのぞく地層、どのようにして出来たのか好奇心が湧いてきます。それとともにこのような場所で暮らす人々の生活や信仰にも興味が湧いてきます。



**ジオパーク賞：個性豊かな、
 まぁ〜るい畑**
撮影者：高場智博（長崎県）

撮影場所：長崎県 五島列島福江島の三井楽半島
 審査委員長講評：五島列島ジオパークは昨年 1 月に認定されたばかりのジオパークで、このジオパークを撮影した多くの作品が集まりました。写真を見ただけではピンときませんが、解説を読むと丸い畑も納得できます。地上からでは撮影できないドローンならではの作品となっています。



ジオ鉄賞：日南海岸の洗濯板

撮影者：礪部忠義（福岡県）

撮影場所：宮崎県宮崎市，JR 日南線（内海 - 小内海間）審査委員長講評
講評：宮崎県南部を走る JR 日南線（内海 - 小内海間）の車窓には「青島の隆起海床と奇形波蝕痕」（1934（昭和 9）年天然記念物指定）が広がっています。砂岩の系統的節理群を手前に、16mm 高角で鬼の洗濯岩の迫力と広がり上手く表現されており、構図の美しさが評価されています。黄色の単行列車がアクセントとなり作品を引き立てています。列車の進行方向と地層の走向が一致しているのも面白いです。砂岩泥岩互層は全国にありますが、なぜこの地質が洗濯岩になったのか、洗濯岩のでき方を考えさせられる作品です。（藤田勝代：深田研ジオ鉄普及委員会幹事）



日本地質学会会長賞：屋根瓦のような重なり

撮影者：大坪 誠（茨城県）

撮影場所：兵庫県南あわじ市 阿那賀海岸
審査委員長講評：この作品は 10cm 足らずの地層間の変形構造を撮影したものです。このような小さなスケールの構造は一般の人では見過ごしてしまいがちですが、さすがは地質のプロの眼です。1200 万画素のスマホのカメラで撮影していますが、現在では地質を記録する点では十分です。スケールに置かれたカメラキャップがやや目立ちすぎるので、画面の端に置くとか、カメラキャップ無しの写真も取っておくことをお勧めします。

スマホ賞：スナヘビの大群

撮影者：高場智博（長崎県）

撮影場所：長崎県 五島列島福江島の高浜海岸
審査委員長講評：写真とタイトルを見一瞬、何だろうと思わせるのがこの作品の魅力です。解説を読むと納得です。この作品では余分なものを一切いれず、スケールとなるものが入っていないが魅力となっています。現在のスマホでは標準的な 1200 万画素のカメラで撮影していますが、この程度のスマホのカメラなら A 4 サイズのプリントには十分です。

大学生・大学院生賞：離島の断崖

撮影者：福永拓真（神奈川県）

撮影場所：長崎県壱岐市 辰の島
審査委員長講評：壱岐島は博多から高速船で 1 時間余り、そこから辰ノ島へは遊覧船で気軽に行ける場所のようです。この作品は島の高台から南東方向に海食崖、さらに遠方の地形を撮影したものです。青い空、白い雲、遠方の砂浜には人影も見えて行きたくなるような場所ですが、ジオフォトとしては手前の海食崖にもう一步インパクトが欲しかった。





入選：太古の覗き穴

撮影者：佐藤 孝（新潟県）

撮影場所：新潟県佐渡市宿根木

審査委員長講評：評者は甌穴（ポットホール）が川の流水によってできるものだと思っていましたが、この作品を見てはじめて波浪による甌穴があることを知りました。超広角レンズで甌穴を手前に入れ、遠景では海岸の様子を示しています。逆光でおどろおどろしい雰囲気となり、インパクトの強い作品となりました。



入選（中高生）：真夏の断崖

撮影者：新宅草太

撮影場所：鹿児島県薩摩川内市甕島 鹿島断崖

審査委員長講評：ジオパーク下甕島の鹿島断崖は付近から竜脚類の歯が発見されて有名になっています。作者は、そこを訪れた感動を素直にスナップしています。このような知名度の高い露頭はインターネットなどで多数の画像がみられるので、それらを参考にしてジオフォトとしてレベルアップして欲しいと思います。



入選：一期一会の姿

撮影者：藤倉聖也（群馬県）

撮影場所：東京都 伊豆諸島新島

審査委員長講評：新島の東海岸にある白ママ断崖を望遠レンズで南に向けて撮影した作品です。遠景は南 2km 沖にある早島です。このような露頭は日差しが強く当たると影ができてしまいますが、この作品では全体に光が回って地層ごとの粒度の違いが読み取れます。断崖が新鮮で草などに覆われていないのが気持ち良いです。遠景に人などを入れて露頭の巨大さがわかってさらによかったです。



入選：刻々と

撮影者：新垣隆吾（沖縄県）

撮影場所：沖縄県南城市の海岸

審査委員長講評：新垣さんは 2 年前の当コンテストで『地底の世界』（ルーマニア）で最優秀賞を授賞された方です。今回は地元沖縄の海岸で撮影された作品を応募されました。朝日に照らされた形の良い石灰岩のノッチ、海面に映るノッチや雲の影など、画面構成や露出のコントロールが絶妙で気持ちの良い作品になっています。

佳作（11点）：

惜しくも入選には至らなかったものの、より多くの優れたジオフォト作品を発掘するために「佳作」を設け、作品画像をWEB上で紹介します。

- ・朝永武志（長崎県）断崖と白亜の灯台
- ・横江憲一（北海道）地球の吐息
- ・宮田敏幸（兵庫県）湖底の朝
- ・市谷和也（埼玉県）吸い込まれそう
- ・遠藤悠一（茨城県）迫り上る大地

- ・後藤文義（神奈川県）湘南好日
- ・石原孝陽（神奈川県）遼遠の時を経て
- ・福村成哉（和歌山県）波にも負けず
- ・坂内愛莉（長崎県）朱、一点
- ・加藤慶彦（秋田県）厳冬の岩脈
- ・荒木英里（神奈川県）連なる漢字の所以

※入選作品、佳作の作品画像や撮影者からのコメント、地質学的解説は学会HP「地質フォト」に掲載予定です。

ゴンドワナ地質環境研究所・トリブバン大学 吉田 勝
 トリブバン大学トリチャンドラキャンパス地質学教室 M. R. Paudel
 北海道大学総合博物館 在田一則
 島根大学総合理工学部 酒井哲弥
 ネパール科学技術アカデミー B.N.ウブレティ

第11回学生のヒマラヤ野外実習ツアー（SHET-11）は予定通り3月3日から19日にかけて実施された。参加者は日本各地5大学の学生11人、ネパールのトリブバン大学生2人、中国の成都技術大学院生1人と日本の山岳写真家1人で、合計15人、指導教員は筆者とトリブバン大学のM.パウデルでチームの総勢は17人であった。当初参加登録した日本人学生は13人であったが、1人は日本帰国時にPCR検査が陽性となる可能性を恐れて12月初旬にキャンセル、もう1人は空港でパスポート残存有効期間不足が判明し、出発できなかった。

今回、日ネ両国の入国規制は昨年よりやや緩められており、また外務省による新型コロナウイルス感染症についてのネパールの危険レベルは1「渡航・滞在には特別な注意が必要」とされていた。当時ネパールの1日の新規感染者数は1人前後、途中通過の国のマレーシアは170人で、1万人レベルだった日本より遥かに安全だったのである。しかし日本入国時にはワクチン3回以上の接種あるいはネパール出国72時間以内のPCR検査陰性証明が必要とされた。幸い、ネパール入国時や日本帰国時のPCR検査は、該当した数人は全員陰性であった。

カトマンズに深夜到着の翌日午前中はトリブバン大学トリチャンドラキャンパス(TU)でのプレツアーセミナーで、ウブレティ教授による名講義「ヒマラヤの生い立ち」は、多数の見事な画像と明瞭・明晰な英語で、参加学生に強い感銘を与えた。午後は恒例のTU学生によるスワヤンブナート寺院見学で世界遺産とカトマンズ市の眺望に感激、夜はTU教員ら4人の参加を得て懇親・夕食会で、参加者全員が英語で自己紹介を行なった。

野外実習コースは例年と同じで、カトマンズ～ボカラ（泊）～カロパニ（泊）～タトパニ（泊）～ポカラ（2泊）～タンセン（泊）～ルンビニ（泊）～カトマンズというヒマラヤ造山帯を北から南へ、トランスヒマラヤからガンジス平原まで貸切バスで10日間のツアー、その内ムクチナート～タトパニ区間は主

に徒歩であった。野外実習内容は例年とほぼ同様であり、実習テキストは例年通りYoshida and Ulak (2017)を使用した。野外ツアー期間中、天候はおおむね良好で、徒歩区間で1日降雪のため難渋したが、全体として大きな問題はなく、以下の諸点を除いてはほぼ予定通りの見学・調査を行うことができた。なお、ネパールの地質鉱山局（DMG）では昨年5月に外国チームによる国内の野外調査活動と標本の持ち出しに対して厳格な規則を定めたので、SHET-11はそれに従った。そのために日本出発前からTU側とさまざまな打合せ、書類やサンプル袋の準備などかなりの苦労があった。さらに、アンナプルナ自然保護地域（ACAP）での野外調査活動には特別な許可が必要とされ、タトパニ以北での調査活動はしないということになった。このためこの区間の実習ツアーでは地質や地形の観察と説明だけとなった。次回からはACAP調査の特別許可の取得が必要である。

野外ツアーでは主な徒歩区間のうち、カグベニ～カロパニ区間は冷雨・降雪のため十分な観察ができなかった。とりわけ南チベットディタッチメント断層（STDS）のチャクタン谷付近では転石の観察はできたが、ベンをもてない濡れと寒さで、チャクタン谷右岸近くの道路壁新露頭でのSTDS探索を放棄せざるを得ず、残念であった。また、ラムディ南のアンガハ谷では、谷底転石のストロマイト化石の探索は従来より数100m下流で見事なストロマイト化石を多数観察できたが、道路から谷底に通ずる踏み跡が長い急斜面でかなり困難であった。毎年のことであるが、このアンガハ谷の調査ルートはなかなか確定できない。また、野外ツアーの最終日、ガンジス平原のルンビニ～ナランガート区間は濃霧のため期待が大きかった大ヒマラヤの眺望ができなかった。

カトマンズ帰着後第1日目は早朝に一部のメンバーはPCR検査、午後はサマリーセミナーで、参加者全員が英語で、ときにはパワーポイントを使い、まずは無事に報告できた。夜はTu

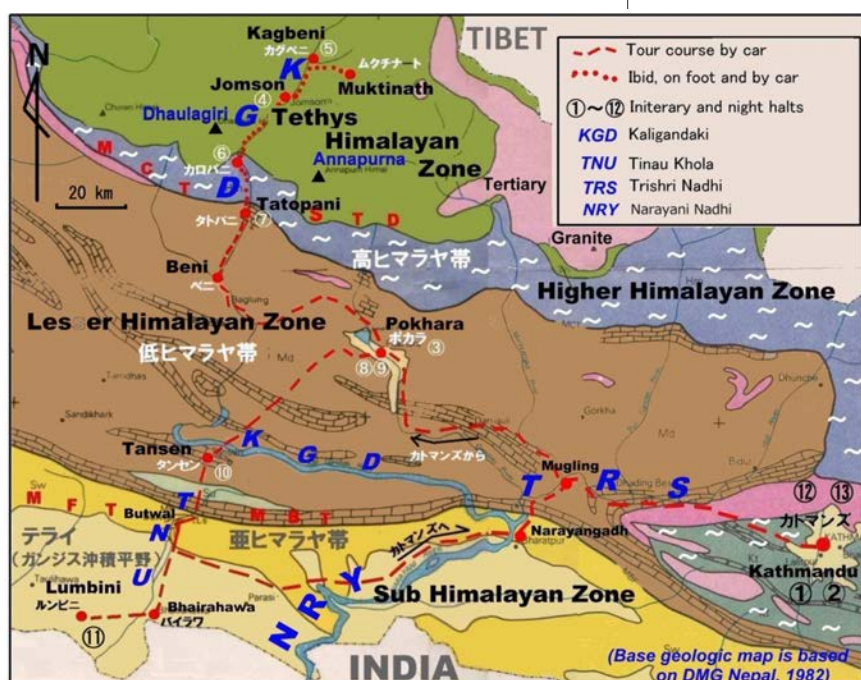


図1 実習ツアーのコースと日程（地質概略図はDMG, 1982から抜粋）



図2 ダウラギリの下で、SHET-11 チーム全員

教員4人を加えてタメルの日本食レストランでお別れ夕食会を行った。翌日は丸一日、TU学生たちに案内されて2グループに分かれての市内見学ツアーであった。本実習ツアーの毎日の行動詳細は吉田（2023）で報告した。

帰国の日、空港では岩石サンプル持出しを心配していたが、セキュリティ検査官はDMGの許可証を一瞥しただけで全く問題なく通過できた。検査の厳密度は検査官の個性によると思われたので、毎回許可証が必要なのは確かである。

野外調査期間の前半は高所障害を呈した1人以外は全員元気であった。しかし、後半から帰国後にかけて6人前後に喉の痛み、咳、下痢や発熱があった。これらは、とくに寒かった降雪日の野外活動直後から風邪症状を示した参加者らと、発熱と下痢があるため細菌性の胃腸障害に罹患したと思われる学生らがほぼ半々であった。後者の学生らは帰国後病院で診察・治療を受けて1週間前後で回復した。

SHET-11では暫定参加費を20万円としていた。ネパール国内の諸経費は数年前から漸増して来ているが、今年はとりわけ山岳地域での食事料金が高騰していた。これらのためにチームとして経費節約に大きな努力を払い、ネパール国内経費を一人当たり114,330円と、従来と同程度に抑えることができた。しかし

中国系のフライトがストップしていたために一人当たりのフライト料金+VISA料金は平均124,001円と過去10回の平均78,445円の1.58倍となり、学生1人当たりのツアー経費は238,331円と過去2番目の高額となった。これに対して一般対象のクラウドファンディングや1組織からの寄付金などによる参加費補助が一人当たり22,730円で、結局学生1人当たりの参加費は平均215,601円と過去10回の実習ツアーの中で最高額となった。

学生のヒマラヤ野外実習プロジェクトでは第12回の実習ツアーを来年3月に実施する予定である。しかし上記のように、航空運賃やネパール国内の諸経費が高騰しているために、学生参加費が20万円を越えてしまうことは避けられない状況になりつつある。これを避けるためには昨年から開始したSHET対象のクラウドファンディング^{*}を毎回充実させていかねばならないし、また文科省や民間諸組織の補助金獲得の努力も再開せねばならないであろう。関係各位のご協力を期待したい。一方、過去11回の実習ツアーの引率・指導と総責任はすべて筆者が務めてきたが、筆者は今年ですでに80台後半に入り、若手と交代すべき時が迫っている。SHETの引率・指導者の候補者32人を含むご関心の皆様にぜひ積極的なご検討を頂きたい。

引用文献

吉田 勝, 2023, 第11回学生のヒマラヤ野外実習ツアー引率日誌。(吉田勝編, 2023) ヒマラヤ造山帯大横断2023—第11回学生のヒマラヤ野外実習ツアー 2023年3月の記録, フィールドサイエンス出版, 印刷中。

Yoshida, M. and Ulak, P.D., 2017, Geology and Natural Hazards along Kaligandaki and Highways Kathmandu-Pokhara-Butwal-Mugling—Guidebook for Student Himalayan Exercise Tour. GIGE Misc. Pub. 35, Field Science Publishers, 145 pages.

^{*}「学生にヒマラヤで学ぶ機会を！プロジェクト」

<http://www.gondwanainst.org/cf>

表紙紹介

第14回惑星地球フォトコンテスト：最優秀賞 「古代の双六」

撮影場所：長崎県平戸市生月島 塩俣断崖

撮影者より：地元で見る事が出来る柱状節理。眺めていたら『スゴロクのマス』の様で面白いと感じ撮影しました。

地質解説：九州の北西部にはアルカリ玄武岩が広く分布しており、各所で平坦な玄武岩台地が形成されています。この写真の撮影地は陸上で見られる分布域の西端近くにあたる、長崎県平戸市の生月島（いきつきしま）で、いまからおよそ700万年前に噴出した北松浦玄武岩類とよばれる溶岩の見事な柱状節理が捉えられています。北松浦玄武岩は、沈み込み帯でできる一般的な火山とはことなり、下部マントルなどかなり深いところから上昇してきたマントルダイアピルの影響で形成されたマグマが噴出したものと考えられています。（萬年一剛：神奈川県温泉地学研究所）

撮影者：朝永武志（長崎県）



市民対象公開シンポジウム 「ジオパーク地域に伝わる伝承と地質学： 古代からの自然観を今に活かす」実施報告

2023年1月28日（土）10:00～14:25に実施した表題の市民対象公開シンポジウムの報告をする。開催はZoomおよびYouTubeでのオンライン生配信で行った。当日の内容は現在YouTubeで視聴できる（<https://www.youtube.com/watch?v=7e0rAAMZqNI>）。日本ジオパークネットワーク（JGN）および日本ジオパーク学術支援連合（JGASU）との共催とし、ジオパークの関係者やジオパークに興味のある一般市民の参加を促した。

参加者はZoomとYouTubeでの参加者を合わせて、214名と多くの方に参加いただいた。参加者へのアンケート結果（総数116）によると、参加者の内訳は本学会会員が31%、非会員が69%で、学会員以外の方に多数参加いただくという目的は果たしたものと考えられる。所属で見ると、官公庁・自治体（各ジオパークを運営する団体、ジオパークガイド等を含む）が22%、企業関係者が33%であった。このことは、当初の目的から考えて嬉しい結果であったが学生の参加が3%と低かったのは残念である。

参加者の年齢構成を図1に示す。60歳代と70歳以上の方が60%を占めており、それに続くのが50歳代で、20歳代と30歳代が合計で10%未満であった。これはガイドの方が多数参加されていたことが一つの要因と考えられるが、今後のジオパークの一層の活性化をめざすとする、ベテランのガイドだけでなく、若手の多いアクティビティ系ガイドの方にも多数参加してほしい。若者にとってもジオパークが魅力的になるよう、本学会でも支援活動を展開していくことが今後の課題となる。

参加者の満足度を図2に示す。90%近い方が「とても満足」、「満足」を回答されており、参加者の期待に対応できたものと判断される。具体的には、『人が自然とどのように向き合い理解しようとしてきたのかを、伝承や地域文化と自然を総合的に分析できて、現在の私たちが自然とどのように向き合っていくかを考える良い機会になった』、『ジオパークでガイドを行う際のヒントが得られた』などの感想とともに、今後とも人文系と

の接点となるようなシンポジウム企画への希望などが寄せられた。今回のシンポジウムをふまえて、より充実した内容の第2弾のシンポジウムを考えていきたい。

当日のプログラムを下にあげておく。

■開会挨拶：岡田 誠（会長）

■趣旨説明：天野一男（ジオパーク支援委員会委員長）

■講演

- ・ Geomythology（地球神話）をジオパーク活動にもっと活かそう：野村律夫（島根半島・宍道湖中海ジオパーク）
 - ・ アイヌ民族の伝承とジオパーク：大野徹人（アポイ岳ユネスコ世界ジオパーク）
 - ・ 磐梯山に伝わる伝説・昔話：竹谷陽二郎（磐梯山ジオパーク）
 - ・ 大国主命（出雲）と奴奈川姫（古志）の伝説からたどる糸魚川ジオパークの景観：竹之内 耕（フォッサマグナミュージアム）
 - ・ 日本三大奇勝『妙義山』にまつわる伝説 巨人が射抜いた穴・星穴伝説：関谷友彦（下仁田ジオパーク）
 - ・ バケモノ伝承を科学的視点で読んでみよう：荻野慎諸（恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク）
 - ・ 南紀熊野の地形・地質から読み解く神話伝説：此松昌彦（和歌山大学教育学部）
 - ・ 岡山県新見市に伝わる薬蛇を使用した神事と伝説：先山 徹（NPO 法人地球年代学ネットワーク）
 - ・ 異分野間の対話と連携を目指すジオパークのネットワークの取り組み：山崎由貴子（日本ジオパークネットワーク）
- 総合討論 テーマ：各地の伝承・神話伝説の扱われ方とジオパーク交流へ向けて（座長：野村律夫）

全体司会：松原典孝（兵庫県立大学）

世話人：野村律夫・松原典孝・山崎由貴子・郡山鈴夏・天野一男

（文責：天野一男）

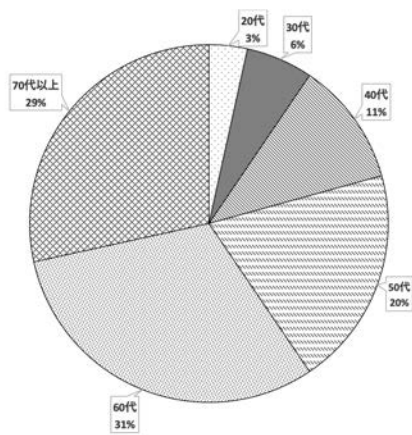


図1 参加者の年齢構成

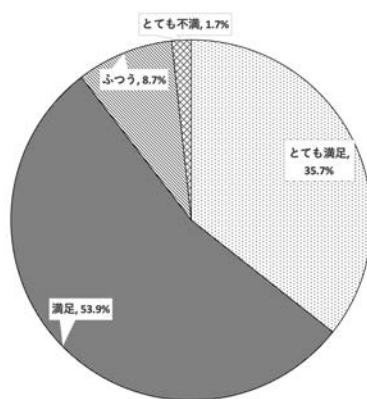


図2 参加者の満足度

地質学雑誌

地質学雑誌は、2022年（128巻）からは完全電子化となりました。会員の皆様に、公開されている新しい論文をご紹介します。ぜひJ-STAGE上で本論文を閲覧してください。QRコードからも各原稿にアクセスして頂けます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/-char/ja>

新しい論文が公開されています

総説

地球と火星に見られる球状鉄コンクリーションの産状と成因

長谷川 精, 吉田英一, 城野信一

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0052>

球状鉄コンクリーションは、地球だけではなく火星の地層でも見られる。本稿では、地球や火星の鉄コンクリーションの産状や元素組成とその成因について、提示されている証拠や仮説を網羅的に紹介した。ユタ州やモンゴルの証拠に基づき、鉄コンクリーションはカルサイトコンクリーションが先駆物質であり、地層中に浸透した鉄分に富む酸性流体との中和反応により形成されたことが示された。さらにメリディア平原の鉄小球（ブルーベリー）とゲールクレーター球状ノジュールの証拠と比較することにより、火星でも先駆物質の炭酸塩小球と、酸性流体の浸透に伴う中和反応により形成された可能性が示唆された。すなわち火星の球状コンクリーションは、ノアキス紀後期～ヘスperia紀前期（38～37億年前）の厚いCO₂大気下の炭酸塩沈殿と、ヘスperia紀後期（35～32億年前）の酸性流体による溶解を示す、太古の環境変遷史を記録する重要な遺物である可能性が明らかになった。



論説

兵庫県西北部、但馬御火浦の下部中新統八鹿層の盆地構造・堆積年代・古応力

羽地俊樹, 佐藤大介, 仁木創太, 平田岳史

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0053>

山陰地方の中新統堆積盆地の成因の特定に向けて、本論は兵庫県西北部の但馬御火浦地域の中新統八鹿層と基盤の境界部周辺の調査研究を行った。八鹿層の軽石火山礫凝灰岩のジルコンU-Pb年代測定を行い、19.63±0.15 Maの年代値を得た。この年代値は遠方地域の同層の年代制約と調和的であり、八鹿層の火成活動は広域的に同時期に起こったことが明らかとなった。基盤と八鹿層の境界には基底礫岩と判断される堆積性の角礫岩が点在し、境界部に断層は認められない。このことは八鹿層が基盤をアバット不整合に覆っていることを示している。本地域で見積もられるアバット不整合の比高は200 mを越え、山陰地方の中新統の層厚差には堆積時の古地形が寄与していた。八鹿層相当の岩脈群の方向解析によって、NNE-SSW方向に引張する応力比の低い正断層型応力を得た。この結果は、当時の山陰地方が多様な方向のグラーベンが形成されうる造構応力場にあったことを示唆する。



論説

長崎半島東岸長崎市北浦町の上部白亜系層序の再定義とその地質年代学的意義

宮田和周, 中田健太郎, 柴田正輝, 長田充弘, 永野裕二, 大藤茂, 中山健太郎, 安里開士, 中谷大輔, 小平将大

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0057>

長崎半島東海岸に露出する上部白亜系“北浦層”を長崎北浦層と改定した。本層は下部の赤崎ノ鼻砂岩泥岩部層と上部の座頭浜礫質砂岩泥岩部層に二分でき、両部層は断層で接する。赤崎ノ鼻砂岩泥岩部層から産した2種のアンモナイト類（*Polyptychoceras obatai*とcf. *Phylloceras* sp.）と1種のイノセラムス類（*Platyceramus japonicus*）、座頭浜礫質砂岩泥岩部層から産したハドロサウルス上科の鳥脚類恐竜の大腿骨化石を記載した。赤崎ノ鼻砂岩泥岩部層の軟体動物化石と碎屑性ジルコンのU-Pb年代から、長崎北浦層の時代は後期サントニアン期以降であり、おそらくカンパニアン期におよぶ。座頭浜礫質砂岩泥岩部層は岩相から長崎半島西海岸の三ツ瀬層の下部（中期カンパニアン期）に対比できる。長崎北浦層の層序は西九州の上部白亜系姫浦層群の下半部に関連すると考えられる。



論説

球状鉄コンクリーションの鉄殻成長過程の実験的解明

岡村裕之, 城野信一

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0058>

ユタ州ナバホ砂岩には球状鉄コンクリーション（サイズ：数mm-数cm、内部：砂、表面：酸化鉄殻）が存在する。鉄殻の形成過程や形成時間をシミュレーションで再現した先行研究はあるが、コンクリーションの内部空隙や溶存酸素濃度の鉄殻形成への影響などが実験的には解明されていなかった。そこでシャーレ内で人工的に鉄コンクリーションを作製し、形成されていく鉄殻（褐色帯）をカメラで撮影する実験系を確立し、画像解析と蛍光X線分析を通してこれらの解明を試みた。その結果、天然の球状鉄コンクリーションの殻形成において、次の2つのことが示唆された。（1）鉄殻形成の初期段階において、短期間で鉄殻が急増するプロセスが存在し、内部空隙が多い程、急増するときの幅は大きくなる。（2）明瞭な殻を持つ鉄コンクリーションは、高い溶存酸素濃度よりも、低い溶存酸素濃度下で形成された。



レター

東京低地の埋没谷形状と地盤震動特性：上野-小岩測線での検討結果

中澤 努, 長 郁夫, 小松原純子, 坂田健太郎, 中山俊雄

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0059>

To better understand how ground motion in the Tokyo Lowland is affected by the geological conditions in the shallow subsurface, we analyzed borehole logs and conducted microtremor observations along the Ueno-Koiwa survey line, which crosses the buried valley beneath the Tokyo Lowland. Remarkable peaks in the H/V spectra at ~1 Hz were found in the area of the lower buried terrace (buried flat surface 2), whereas the peaks at ~1 Hz are small in the area of the buried valley bottom with the thickest valley-filling post-Last Glacial Maximum (LGM) deposits. The sharp peaks around buried terrace 2 are generated by the large contrast in the physical properties of the soft, muddy post-LGM deposits and the underlying gravel bed, which suggests larger ground-motion amplification during an earthquake. The variation of the ground motion characteristics along the survey line obtained by



地質学雑誌

microtremor observation is consistent with the distribution of seismic intensity during the 1923 Kanto Earthquake. It is, therefore, important to consider not only the thickness and physical properties of the post-LGM deposits during seismic hazard assessment, but also the total geological composition, including the Pleistocene strata below the post-LGM deposits.

巡検案内書 チバニアンGSSPサイトと陸化した前弧海盆上総層群の層序

岡田 誠, 羽田裕貴

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0060>

房総半島中央部にはいずれも前弧海盆堆積物とされる中新統-鮮新統の安房層群とそれを不整合で覆う更新統の上総層群が広く分布する。両層群は多くの凝灰岩層を含み同時面間の特定が容易であり露出も良好であることから、1950年代より層位学的研究が精力的に行われてきた。特に平均堆積速度が2 m/千年と比類無き速さを示す上総層群は、世界トップクラスの時間分解能を持つ地磁気逆転記録などが根拠となり、ながらく未定であった下部-中部更新統境界のGSSP（国際境界模式層断面とポイント）が設置されたことで世界の注目を集めている。本巡検では、半島西部に分布する安房層群最上部と黒滝不整合を観察し、その後は上総層群を下位層から順に巡ってゆく。栗又の滝では深海盆の泥岩卓越層と広域テフラのKd18を、養老溪谷温泉街では深海盆のタービダイト性砂岩泥岩互層における堆積構造や岩相変化を、そしてチバニアンGSSPサイトでは斜面堆積層の塊状泥岩層と無数に見られる生痕化石、およびチバニアン期/カラブリアン期の境界を定める世界基準となった白尾火山灰層を観察する。



論説

北海道中央東部糠平湖周辺の後期新生代の古植生と古環境：後期中新世十勝幌加植物群と前期更新世タウシュベツ植物群

成田敦史, 乙幡康之

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0062>

北海道中央東部の糠平湖周辺に分布する十勝幌加層とタウシュベツ層から大型植物化石群を得た（十勝幌加およびタウシュベツ植物群）。当地域の層序と火山性堆積物の放射年代測定値から、タウシュベツ層は下部更新統に改められる。後期中新世の十勝幌加植物群は47分類群、前期更新世のタウシュベツ植物群は42分類群より構成され、両者ともに本木ではウダイカンバ類縁種を優占種とし、他のカバノキ科やカエデ属などの落葉広葉樹と常緑針葉樹を含む古植生を示す。両植物群では、含む分類群に相違も多いが、類似した相観の植生を示す。これは、両者が火山活動の影響や類似した湿潤冷温帯気候下で成立した可能性を示す。



論説

福島県南部、二岐山火山の噴火史とマグマ供給系

渡部将太, 長谷川 健, 小畑直也, 豊田 新, 今山武志

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2022.0061>

北海道中央東部の糠平湖周辺に分布する十勝幌加層とタウシュベツ層から大型植物化石群を得た（十勝幌加およびタウシュベツ植物群）。当地域の層序と火山性堆積物の放射年代測定値から、タウシュベツ層は下部更新統に改められる。後期中新世の十勝幌加植物群は47分類群、前期更新世のタウシュベツ植物群は42分類群より構成され、両者ともに本木ではウダイカンバ類縁種を優占種とし、他のカバノキ科やカエデ属などの落葉広葉樹と常緑針葉樹を含む古植生を示す。両植物群では、含む分類群に相違も多いが、類似した相観の植生を示す。これは、両者が火山活動の影響や類似した湿潤冷温帯気候下で成立した可能性を示す。



地質学雑誌特集号（冊子）販売のお知らせ

球状コンクリーションの科学—理解と応用—

Spherical concretions -understandings and applications-

世話人 吉田英一ほか

【内容】本文フルカラー A4 版、約 150 ページ（従来の地質学雑誌とは用紙、印刷、製本方法は異なります。）

【価格】2,600 円 / 冊 + 送料 370 円（会員価格）

【申込方法】会員氏名、送付先を明記して、学会事務局までお申し込みください。合わせて上記冊子代金をご送金ください。なお、複数冊購入希望の場合は、学会事務局までお問い合わせ下さい。

【申込受付期間】2023 年 5 月 31 日（水）※残部があれば、ジオストアでも販売いたします（定価：3,000 円 + 送料）

【申込先】メール：main@geosociety.jp, FAX：03-5823-1156

【送金先】郵便振替口座 00140-8-28067 日本地質学会

ゆうちょ銀行 〇一九（ゼロイチキユウ）店 当座 0028067 一般社団法人日本地質学会（社）にホシツガツカイ



☆関東支部

案内

学生・初級者向け
「地質断面図」の書き方講座のお知らせ
—布良海岸巡検—

日本地質学会関東支部では、一昨年より標記の講座を実施しています。

館山市布良海岸付近をフィールドに、野外地質調査を実施します。学生・初級者向けです。

地層・堆積岩の見方を学び、測定した走向・傾斜をもとに地質断面図を描けるようにする講座です。

野外地質調査に慣れない方、堆積岩の見方を勉強したい方、大歓迎です。

期日・場所：

2023年5月27日（土） 10:30～14:30 千葉県館山市布良海岸付近で野外調査

2023年5月28日（日） 10:00～13:00 JR総武線船橋駅～千葉駅付近（場所未定）で地質断面図作成（室内作業）

募集人数：最大6名 学生優先、余裕がある場合学生以外も受け付けます（希望者は7.0CPD単位取得可能）

費用：学生一人6,000円、一般一人10,000円（最寄り駅から館山駅・千葉駅までの運賃は含まず）

申込期間：2023年5月7日（日）～5月19日（金） 定員になり次第締め切り

申込方法：下記の申込先に、氏名・ふりがな・所属・学年・年齢（保険に必要）・連絡先（携帯番号）を明記しメールで送ってください。申込者には受け付けメールを返信します。申込み後3日経っても返信がない場合は問い合わせてください。

問い合わせ・申込先：米澤正弘 e-mail: my-yonezawa@y6.dion.ne.jp

学生優先です。学生以外の方はキャンセル待ち状態の扱いとなります。5月20日（土）に可否を連絡します。

その他：

1. 詳細については参加人数確定後ご本人宛にメールで連絡します。
2. 事前課題を出す予定です。期限までにご提出ください。
3. キャンセルの場合は速やかにご連絡ください。キャンセル料—7日前～前日：50%、当日：100%
4. 荒天が予想される場合の中止判断は前日18:00までに行い、電話で各参加者に連絡します。

※コロナウィルスの感染拡大状況によっては、中止・延期することがあります。

担当：日本地質学会関東支部幹事 米澤正弘、加藤 潔、方違重治

☆関東支部

報告

アウトリーチ巡検報告
相模原市の相模野台地の地形・地質観察

2023年2月19日（日）、関東支部行事としてアウトリーチ巡検を実施した。参加者は26名で、60歳以上の方が中心であったが、小学校入学前のお子さんや小学生、20歳の若い世代にもご参加いただいた。全行程徒歩での巡検で、講師は河尻関東支部幹事が務めた。相模野台地は、神奈川県中央部を流れる相模川中流域に中期更新世以降に形成された台地で、段丘地形が発達している。相模野台地は高位より、座間丘陵、高座台地、相模原段丘、田名原段丘、陽原段丘に区分されており、今回の巡検では、後期更新世以降の中位および低位段丘に相当する相模原段丘、田名原段丘、陽原段丘の段丘地形と段丘堆積物を観察した。当日はまず相模原段丘上に集合し、順次下位の段丘へと下っていった。段丘面上では谷状の凹地や段丘面を刻む小河川の地形などを、段丘崖ではそれぞれの段丘を構成する段丘礫層や関東ローム層、湧水を観察した。関東ローム層には始良Tn火山灰や相模野第1スコリアなどの特徴的なテフラが挟まれており、これらについても観察した。参加者は非常に熱心で、露頭に近づける場所では、堆積物に触れたり手に取ったりするなどして観察していた。各見学ポイントでは活発に質問も出され、相模野台地の概要についてご理解いただけたと思う。また、コースの途中にあった中世の豪族の館跡の周囲に残された堀や江戸時代の長屋門について案内したところ、これらの歴史的な場所についても、参加者は興味深く見学していた。事前の天気予報では雨も心配されたが、雨に降られることもなく、午後からは汗ばむほどの陽気となった。天気にも恵まれ、事故もなく無事巡検を終了することができた。巡検に参加された方々、また、実施にあたりサポートしていただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げる。

（担当支部幹事：河尻清和・米澤正弘）

【参加者感想】

コロナも下がりをはじめ、天気も予報では小雨でしたが幹事の念力で晴れて絶好の地質観察日和になりました。20数名、老若男女、お互い見知らぬ同士でしたがその姿で同志と分かりすぐに仲良くなりました。

出発前、幹事の方々から、良く整理された地図と案内書が渡され、慣れない地名、専門用語を説明され、工夫された地形図、地質図、ブロック断面図で基礎知識が紹介されました。

見学の多くは公園の立地内にあり、浸食で削られ谷戸になった坂道で段丘崖からなるところ。上部の関東ローム層、下部の礫層、そこから出る湧水など見学しました。

ローム層の下部には東京軽石、始良火山灰、相模野第1スコリアなどが存在し、一同、一目見たさにそれらを探しました。黒いスコリアは発見されましたが、残念ながら白色の始良火山灰は掘りつくされていました。見つければダイヤのように見えたいでしょう。

専門家や素人を含む参加者がいろいろな角度から質問をされ、河尻講師は丁寧にサンプルをとりながら熱心に説明されていました。どこを探せば、どうしたら出てくるのか、一同様々に質問していました。また、ローム層下部の礫層では丹沢山地からの凝灰岩が多いことを説明され、チャートや玄武岩と間違えた素人判断に対して、岩石の特徴、起源、など丁寧に立証さ



集合写真—当麻東原公園にて



田名原段丘の関東ローム層を観察する参加者

れていました。

途中、昼休みも兼ね、当麻東原公園の高台から一大スケタクルの眺望を楽しみました。丹沢山地、各種丘陵、台地、低地、相模川と関東山地の全地形を一望することができました。全体で7 stop、一万歩（概数）の地質観察でした。

午後に、別の同様な段丘崖を観察しました。近くにありながら異なった段丘になっていて、ローム層は同じで礫層が異なっていて、堆積時期の違いと礫種の相違を示しておりました。礫の配列が流れによって変化するさまを、図版を使って分かりやすく説明を聞きました。最後に最も古い依知礫層では、風化作用で弱くなった礫層も観察しました。

当麻駅にて散会の挨拶を、関東支部幹事米澤さんから頂きました。個々の露頭に限ることなく、広く、台地を眺めるとまた広く理解できること、添付の案内書を参照されるよう、すすめられました。翌日、詳細を読み、よく理解できました。編集された幹事さんにお礼を申し上げます。幹事さんのご苦勞をねぎらい一同拍手でこたえました。

最後に勝手ながら自分の参加について話させていただきま。古淵駅から15分の鴨居駅の近く、丘の上の白山町に住み、天気の良い日には高台から西の箱根、丹沢、奥多摩、秩父連山がパノラマのように見え、近くに多摩丘陵も見えます。日ごろ、下末吉台、多摩丘陵の尾根をウォーキングすると、多くの谷戸が見つかります。それを下ると湧水があり、里山があります。この見学会でこれらの成因を学ぶことができ、地質学が身近に

感じられました。幹事の方々、参加された方々に大変お世話になりました。

（松原義雄）

【参加者感想】

私は、生まれも育ちも相模原です。高校生の頃、講師の河尻先生には相模原市の地質に関して教えていただき、大変お世話になりました。今回、改めて学び直したいと思い参加させていただきました。

この巡検では、相模原市を構成する相模野台地の地形（河成段丘）の特徴と、段丘をつくっている地層を観察することを目的とし、河成段丘の相模原段丘（上段）、田名原段丘（中段）、陽原段丘（下段）へと各地点を見学する行程でした。

上段から下段へと見学し、各段丘を構成する地層の種類や厚さ、位置関係等を確認しながら理解することができました。また、見学場所の当麻東原公園からは、相模野台地と中津原台地を構成する各段丘を観察しました。段丘と段丘の境は急な崖（段丘崖）で、住宅などの建設物はなく、斜面林となっており、段丘崖をよく観察することができました。

最後に、この巡検を通じて生まれ育った相模原の成り立ちや特徴を再度理解することができました。ありがとうございました。

（神奈川県立城山高校 鈴木里奈）

☆中部支部

案内

中部支部2023年支部年会開催のお知らせ

日本地質学会中部支部では下記のとおり2023年支部年会を開催します。あわせてシンポジウム、一般講演、ポスター発表、懇親会、および巡検を行いますので、皆様ぜひご参加ください。

日時：2023年6月24日（土）

受付開始	10:30
総会	11:00～11:30
幹事会	11:30～12:30
シンポジウム	13:00～14:15
一般講演（口頭発表）	14:30～15:45

ポスターコアタイム 16:00～17:00

懇親会 17:30～

会場：信州大学松本キャンパス

参加費：2000円（総会のみは無料、大学院生・学部生は1000円）

参加要件：日本地質学会会員であること。非会員の参加は不可。

事前登録：6月15日（木）までにgoogle forms (<https://forms.gle/srl8goJvUd7sflaK8>) にて参加登録・発表申し込みをしてください。巡検に参加する方は6月1日（木）までに登録してください（後述）。

シンポジウム『西南日本の白亜紀花崗岩類』

趣旨：2000年代以降、LA-ICPMSを用いたジルコンU-Pb年代測定が盛んに行われるようになり、日本各地の地質体の形成年代の詳細が明らかにされています。西南日本に分布する白亜紀花崗岩類もその一つであり、年代データの蓄

積や形成についての議論が盛んに行われています。そこで、白亜紀花崗岩類についての年代特性や形成モデルについて考えたいと思います。

- 13:00～13:05 趣旨説明・・・常盤哲也（信州大学）
 13:05～13:25 伊那領家花崗岩類のジルコンU-Pb年代・・・常盤哲也（信州大学）
 13:25～13:45 紀伊半島領家花崗岩類のジルコンU-Pb年代・・・竹内 誠（名古屋大学・産総研）
 13:45～14:05 日本の白亜紀－古第三紀の火成活動場とテクトニクス・・・山岡 健（産総研）
 14:05～14:15 白亜紀花崗岩類についての座談会・・・全員

一般講演（口頭発表）：（14:30～15:45）

- ・最大5件を受け付けます。先着順ですので希望される方は早めの登録をお願いします。
- ・一般講演は、対面のみで行い、各講演15分を予定しています（発表12分、質疑応答3分）。

発表要旨（一般講演の方のみ）：

- ・一般講演に申し込まれる方は上記の事前登録フォームに申し込みの上、6月15日（木）までに常盤（tokiwa@shinshu-u.ac.jp）に講演要旨をメールにて送付願います。
- ・後日、公表論文作成にあたって、支部年会での講演を引用することはできないことになっていますので、ご了承ください。
- ・一般講演の講演要旨はA4版、2頁までとします。
- ・要旨の様式は下記書式に沿ってください。字体は明朝で統一します。お送り頂いたメール原稿をそのままの形で印刷する予定です。
- ・上下余白：3cm 左右余白：2.5cm
- ・タイトル：14p（ポイント）太文字
- ・発表者・所属機関：12p
- ・英文タイトル：12p
- ・本文は1行開けて始めてください。
- ・本文：10.5p

- ・引用文献：9p
- ・図表は枠内に収めてください。
- ・英文原稿の場合は、上記に準じてください。

CPD：地質技術者への継続教育の一環として、大会参加者・発表者へCPD単位を発行します。大会参加と口頭発表の参加証明書は、参加日以降にメールにて送付予定です。

【CPD単位】一般講演：5×発表時間（h）例）15分の場合：5×1/4h=1.25単位、学会参加：1×滞在時間

個人講演（ポスターコアタイム16:00-17:00）：ポスターは10:00～17:00まで掲示することができます。ポスター発表希望者は上記事前登録フォームにて、発表者氏名と発表タイトルを入力してください。なお、学生・院生のポスター発表は優秀ポスター賞の審査の対象となりますので、ふるってご参加ください。

懇親会（17:30）：懇親会を信州大学松本キャンパス内で行う予定です。懇親会費は一般5000円、大学院生・学部生は3000円を予定しています。

巡検：大峰帯第四系と爺ヶ岳－白沢天狗カルデラ・黒部川花崗岩

日時：6月25日（日）8：00～16：00（予定）

内容：大峰山地（北安曇郡池田町）に分布する第四系河川堆積物と大峰火砕流堆積物、扇沢(大町市)に分布する爺ヶ岳－白沢天狗カルデラ・黒部川花崗岩を観察する。

案内者：吉田孝紀・原山 智（信州大学）

問合せ：常盤哲也（信州大学）tokiwa@shinshu-u.ac.jp

参加費：1人5000円程度（参加人数によって若干の変更があります）

・大まかな予定は、8:00信州大学→巡検（貸切バス）→16:00信州大学です。

・昼食は各自ご準備願います。

・参加希望者は6月1日（木）までにgoogle forms (<https://forms.gle/E2J6XynlZqmTe6mW7>) にて参加登録をしてください。

・参加者が15名以下の場合は、キャンセルすることもあります。

今年も地質系業界説明会を開催します！

日本地質学会地質技術者教育委員会では、毎年開催される学術大会の会場において、学生会員が将来就職する可能性のある地質・資源・建設分野に関わる地質系企業・団体との対面説明会を企画・開催し、学生会員が地質系業界を研究するサポートサービスを展開してきました。

今年度は、昨年度と同様に「対面での説明会」と「オンラインによる説明会」の2つを行うことにしています。なお、対面説明会は新型コロナウイルス感染の状況が、現状よりも拡大し行政などからの集会規制が発布された場合は中止することがありますので、ご了承ください。

2023年度学生のための地質系業界説明会

～その業界の仕事を知るためのサポートサービス～（概要）

- ①**対面説明会**：2023年9月18日（月・祝） 学術大会（第130年学術大会 京都大学 2023年9月17日～19日）期間中の18日（月）敬老の日の半日間、会場の専用ブースを訪問し、対面で説明を受け、質問する企画です。
- ②**オンライン説明会**：2023年9月22日（金）午後 学会のHPを介して参加企業・団体にオンライン訪問し、説明を受け、質問する企画です。
- ③当説明会につきましては、関係業界団体、関係学協会にもお知らせし、参加企業・団体が決まった時点で全国の40を超える地質学系学科にも案内します。
- ④参加企業・団体の参加申し込みは6月1日から6月30日、学生会員をはじめ学生層への案内は7月上旬を予定しています。また、参加企業・団体の紹介動画などの資料を学会HPに8月中旬から掲示しますので、事前に企業・団体の情報を見てから当日訪問することができます。
- ⑤今後、当学会HP、SNS、ジオフラッシュ、ニュース誌を介して詳細情報をお知らせします。

一般社団法人日本地質学会第15回総会開催について

第15回総会を下記の次第により開催いたします。

2023年4月15日
一般社団法人日本地質学会
会長・代表理事 岡田 誠

2023年6月3日（土）14:00～15:30
【WEB 会議形式】

総会議事次第

1. 議長選出
2. 開会
3. 議案
 - 第1号議案 2022年度事業報告・決算報告
 - 第2号議案 2023年度事業計画
 - 第3号議案 2023年度予算案
 - 第4号議案 名誉会員の選出
 - 第5号議案 運営規則および選挙規則の変更
4. 閉会

1. 定款20条により、本総会は役員ならびに代議員による総会となります。代議員には、総会開催通知とともに総会に必要な資料等を別途お送りいたします。ご都合で欠席される方は、定款28条第1項にもとづき、議決権行使書および議決権の代理行使（委任状）などにより、総会に出席したものととして議決権を行使することができます。
2. 正会員は、総会に陪席することができます。ただし、総会規則12条3項により、許可のない発言はできません。

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003 年 9 月 19 日 日本地質学会総会制定

2009 年 12 月 5 日 一般社団法人日本地質学会制定 *

日本地質学会の会員は、科学的真理を明らかにする事を目的として、誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う。その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り、もって社会の発展と人類の福祉に貢献する。会員は、基本的人権を守り、良識かつ品位のある行動をとる。

1. 科学者としての倫理：会員は、専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る。研究と調査においては、法を遵守し、社会的良識に従って行動する。科学的事実に対しては常に謙虚、誠実でなくてはならない。研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し、公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する。

2. 知的交流の確保：会員は、国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに、研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める。

3. 人類と社会への責務：会員は、その専門知識と技術を適切に活用し、研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する。

日本地質学会

4. 地球環境への責務：会員は、地球システムの諸現象についての専門家として、地質災害の予知と防止、地球環境の将来予測、資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに、専門知識を活かして環境の保全と改善に努める。自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する。

5. 次世代への責務：会員は、地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展、次世代を支える人材の育成を図る。研究や調査の成果物、重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める。

*2009 年 12 月 5 日法人理事会において、一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定。

